

---

# 死神達の恋歌 ~月の導き~

yatennyue

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神達の恋歌 ～月の導き～

### 【NZコード】

N1849N

### 【作者名】

yatenyue

### 【あらすじ】

精霊術師のうち炎術師であった彼女・雛桜美月は、中学一年生13歳の春、5月に死んだ。

こちらは、ソールソサイテイ 戸魂界サイドです。  
太陽の方が現世サイド。

で彼女の双子妹・雛桜卯月です。

力は最強、ですが精神的に弱め。

といつても普通よりは強いです

過去の世界すべての前世の記憶を持ちます。

冬獅郎 × ヒロインです。（私自身は、彼女がいなければ田園派です）

## 月、太陽 共通プロローグ（前書き）

月、太陽両方共通です

## 月、太陽 共通プロローグ

私は

あの日 死んだ

私の姉の美月は

『零番隊隊長、兼元十番隊第三席副官補佐』

雛桜美月

Mitsukii Hinazakura

最も辛き運命を持つ者

「日番谷隊長には、桃ちゃんがいるし」

勘違い

「大好きつつ」

「消えて」

「・・・仕方ないよ。

冬獅郎にとって、桃ちゃんは、姉か妹みたいななんだと思つかう。」

垣間見たのは、柔らかな微笑

「絶対、ルキアは助けてあげるから。」

何度も 別れてもなんで私は、恋をしてしまったんだろう?

大きな罪を私は、背負っているのに。

・・・  
卯月が私に  
贖罪?  
・・・  
?

「よくも冬獅郎を藍染つ！！」

哀と遊んで満ちる  
アイ  
アイ

# 心優しき少女

「嘘……でしょ。卯月が消滅するなんて……！」

# これが罰？

哀しくも愛しい そして

# 残酷な物語が今紡がれる

それはまるで影のよひに

# 美月は満月のようだ。 ミヅキ

『十番隊隊長』

日番谷冬獅郎

Toushijiro Hitsugaya

氷と雪を操る炎の対。

美月の第一印象は、抜けたヤツ。

第2印象は、失礼なヤツ。

第3印象は、可愛いヤツだった。

気が着けば、美月を目で追っている自分がいた。

松本のヤツにからかわれても、否定できなかつた。

「俺は、お前が好きだ。」

あいつは、いつも自分のことより、他人のことばかり考えていた。

良く言えば、優しい。

だが、

悪く言えば、自分を軽く見ていた。

憐い。

強いが、弱い。

だからこそこそ思つたんだ。

護つてやりたい と。

今まであいつに会つまで、護りたいヤツは雛森だけだつた。

俺にとつて姉であり、妹であつたから。

でも今は、できるならば美月の笑顔と心

そして欲張りかもしれないが、

雛森のことも護つてやりたい。  
そつ思つんだ。

「雛森に血を流せたら、

俺がお前を殺す。」

血を流す雛森

涙を流す美月

血を流し倒れる俺にすがりつく美月

もつと、強くなりたい

消え行く意識の中

感じたのは、暖かな炎。

『水術師』

雛桜卯月

Uduki=Hinazakura

血の呪いを受け継ぐ者

「私のせいだ。  
モノクロ  
白黒の世界。」

姉の残した詩。

いつだつて、私の心を救うのは、  
あの子 なんだ。

たくさんの友達。

美月が死んで3年経つても、なお気にし続けた。  
そして、

知らなかつた周りの人々の思い。  
嬉しかつた。

でも、やつぱり逢いたいから。  
ルキアもだけど、私の1番はやつぱり美月 なんだ。

そんな私が1番キライ。

皆傷だらけ。なのに私は無傷  
美月は重傷。なのに私は護られ無傷。

「私が・・消滅する?」<sup>キリ</sup> 聞いた時

生きたいという思いと、  
やつと死ねるという思い。 2つ の矛盾した思いが胸に満ちた。

絶望への序章が  
始まる。

黒崎 一護

Ichigo=Kurosaki

朽木 ルキア

Rukia=Kuchiki

井上 織姫

Orihime=Inoue

茶渡 泰虎

Yasutora=Sado

有沢竜貴

Tatsukii=Arissawa

小島 水色

Mizuirō=Kojima

浅野 啓吾

Keigo=Asano

卯月の

理解者達

そして・・・

『クインシ滅却師』

石田 雨竜

Ur yuu=Ishida

救済者

「自分が不幸・・・？笑わせんな」

そう君は一蹴したね。

今までの僕の価値観を

だから、僕も言わせてもらう。

「罪？ そんなの関係ないだろ？」

君は逃げているだけだ。『君を傷つけるかもしれない

でも、

何も関係がなかつたからこそ救える

《零番隊三席兼元四番隊二席》

大道寺 鼎月

S a t s u k i = D a . i d o u . j i

共有者 優しき毒舌者

悟る者

あの子達は、本当に溜め込むのが好きですわね。

率直な優しさは、人を救うこともありますが、逆にそれが苦しくなることだってあるんです。

本当に見て居られない、太陽と円

「馬鹿ですわね。そんなことで迷うなんて」

「あなたは、思ひ通りにやればいいんです。」

「少しばかりなさい。馬鹿娘ども。」

いつも、キツイ言葉である・・・不器用な

言葉・・・

でもそれは常に真を指している。

全てを認めている者。

《零番隊四席兼元二番隊二席》

神無月 由宇

Yuu=Kanaduki

共有者

愛を拒絶する者

愛は、破滅への序曲。

アタシは、もう思わないややつでいいなかつた。

・・・自分の想いも分からず、愛を知らず、走り続ける者・・・

でもあの子達には、幸せになつて欲しいから。

「アタシは、そういうの分かんないけど、あなたは違うでしょ。」

「まあ、いいけど」

「イヅル、どうしたの？」

アタシは、自分の気持ちが

安堵の理由が

ワカラナイ

零番隊副隊長兼元一番隊副隊長》

如月 海依

Kisaragi-Kai

共有者

信じようとする者

何度も裏切られても、

人とは汚いものだと知っていても、

信じられようとし、

「どんなことがあつたって俺は俺だから。碎蜂、お前だけは俺を信じて下さい。」 大切な人

「信じるに決まっているだろうが」

また、信じようとする。

・・・男とも女ともとれない、不思議な者・・・

俺はさ、人間つて弱くて醜いものだって知っている。でも、それを知った上で、

俺は信じたいんだ。

それに、俺は、この手にあるもの全てを護りたい。

俺が私（＝女、弱者）を棄てた代わりに。

美月達？

あいつらもだよ。

あいつらは、あの時から罪だつて気にしている。

そんなの気にしないでいいのにな。

俺や星月達が言つても聞きやしない。

あいつらは、力は強い。

最強つて言つてもいいくらいにな。（俺もだけじ 血魔）

でも、心の一部分が酷く弱い。

失つことを恐れている。

だから俺はあいつらを支える。

ただそれだけだ。

そして

「私は、彼のために強くなるの。」

《零番隊七席兼元十一番隊三席》

神代 魅

Miru=Kaneshiro

改造された身体の持ち主

「たとえ私を思ってくれなくとも  
彼が幸せならそれでいいの」

「俺は、あいつのために強くなつたんだ。」

《零番隊六席兼元十一番隊四席》

須王 修宇

S y u u u = S u o u

強さを求める者

「俺が本当に思つてているのは  
誰なんだ？」

すれ違う2人

「僕は、あなたに会いたくて、死神になつたんです。」

《零番隊八席》

那智 葵

A o i = N a c h i

美月を尊敬する者  
そして、血縁者

「僕に何ができるか

わかりませんけど

僕は僕にできることをやるだけです

「何もしないって、性に合わないし」

『六番隊三席』

佐野 明良

A k i r a = S a n o

美月と同じ血を持つ者

そして 崇拝者

「あなたはあなたにできる」とを  
すればいいの。俺はあなたを否定しませんよ」

『零番隊五席兼元六番隊副隊長』

青木 輝

H i k a r u = A o k i

愛に裏切られ、心を美月に救われた者

そして

裏切り者

残されたのは 1枚の手紙  
「だいつきらしい人間を  
もう一度信じたいと

おもつたのは

美月隊長のおかげです」

さあ紡がれ始めるは、愛しくも、残酷な物語。

## プロローグ 始まりの時（前書き）

目の前には大虚メノス

こんなことになるなんて

思いもしなかつた

## プロローグ 始まりの時

私はいつものように、

一護に虚が近付かぬように、

一護から離れてからいつもは零の状態にしてある靈圧を

少し放出した。

いつもと違う所といったらいつも一緒に双子の妹、卯月がない。

ただそれだけ。

いつものように雑魚だけかと思っていた。

なのに、突然の後ろからの攻撃…

私の腹を貫いていたのは

大虚の舌。

一体だけ混ざっていた、新種の靈圧を消すタイプの大虚だった。

私の魂は、あつという間に肉体から引き離されてしまった。

カラダ

(ちつ。今日に限つてつ。  
卯月がいれば、苦労せず氣を引いてもらつて  
その隙に肉体に戻るのに…  
卯月は狙われたりしてないよね。  
因果の鎖はまだ切れてないし、  
早く肉体へ…)

魂から10?離れた肉体へとまず行こうと  
考えている間に、  
視線が大虚にいったせいで  
他の残っていた雑魚が  
私の鎖を

踏みちぎれた。

（もうダメかな。  
卯月には一護がイル。）

そう考え、靈体状態の私は朱い瞳を閉じようとした

その時、

強い冷氣のような靈圧を肌で感じ、

閉じかけた眼を開けると

瞳に入ったのは

銀の髪をもつ死神。

その死神は一刀で大虚を倒し、周りの雑魚達を片付けていく。

全て片付け終えた彼が、私に近づき、言つ。

「大丈夫か？  
つたく、こんな所で靈圧を流すなんて何考えてるんだ、お前は つて  
人の話聞いてんのか！！  
おいつ」

ほうけていた私は、正氣を取り戻す。

不覚にも私はその死神に見とれていた。

私は赤くなつた顔を隠して答えた。

「はつはい」

はつきりいってマヌケ極まりない。

その死神ははあ…とため息をつくと、急に真剣な顔になつて言つ。

エメラルドのような翡翠色の瞳が私を一瞬硬直させる。

「お前、俺が見えるのに俺の服装見て、何も思わないんだな。

俺以外にこんな服のヤツ見たことあるのか？」

私はこの言葉を聞いて

私の男に対する態度にしてはなんの警戒も持たず、

ありのままの事実を言った。

「へ、だつて死神でしょ。

ある程度靈圧あれば見えるの当たり前でしょ。」

彼は、呆れたような顔になつて、  
いつ言った。

「死神が見える人間なんか聞いたことねえーよ  
勝手に決め付けんな！」

私はその言葉を聞いてそりゃえはそりだつた  
と思つた。

でも

「あ、周り一族とか見えるから忘れてた」

「そーかよ。（でも何故こんなに靈圧が低いんだ）

お前名前は？」

靈圧を少ししか出していない状態のままで私は彼の質問に答えた。

「私は 雛桜美月 です。あなたは？」

「雛桜か

俺の名前は日番谷冬獅郎だ」

それは

私という一人の人間の死という終わりと

新たな世界や思いの始まりだった。

しどじと離るのは

それは遺された体を瀧りし、

血を洗い流していく。

太陽と共に通です

## 用語説明 精靈術師とはなど

精靈術師とは

精靈術師

精靈の力を借り、魔を滅ぼす者ら。

そもそも

約千年前5人の若者が、五行を司る神と誓約（自らの誓い）と契約（血を次ぐ者に力を）を結び、代々続いてきた。

その直系は

炎の精靈を操る炎術師の家系、雛桜家

地の精靈を操る地術師の家系、大道寺家

風の精靈を操る風術師の家系、如月家

雷の精靈を操る雷術師の家系、神無月家

水の精靈を操る水術師の家系、神名家

だつたが、

80年ほど前に現世では

神名家は滅びた

また分家は無数にあるため直系の1人が、宗主として術師の上に立つ。

またそれぞれの属性の精霊の加護を受けているため

それぞれの属性のものでは影響を受けず、同じ術師でかつ実力が上の同属性は効く。

また 人それぞれ 周期も 月齢も 違うが力や靈力が不安定になる日が

炎術師だと、満月周辺

水術師だと、新月周辺

地術師だと、満月寄りの半月

風術師だと、三日月

雷術師だと、半月

力が 弱すぎる人と強すぎる人が頻度が多い

まあ 多くとも1年に1・2度

超越者とは・・・

あらゆる次元において神に認められ力を借り受けることを認められたをさす。

その数は今この世界に片手しか存在していない

美月の生家、雛桜家ははるか1000年ほど昔、神獣・朱雀と契約した超越者の血を継ぐ家系である。

いやそれだけではない、ほかの4家、

水の神名家は、神獣・玄武との

地の大道寺家は、神獣・白虎との

雷の神無月家は、神獣・青龍との

風の如月家は、神獣・黄龍との

超越者の血を引く。

それを一族は始祖と呼んでいる（名前は伝わっていないが、5人

は知っている（

精霊術師の家系の戸籍について

はつきりいって作られていますが、関係者以外閲覧不可だし  
たとえ天皇でも見ることは叶いません。

だから

死後であろうと気づかれずに仕事ができるのです

雛桜家

炎術師直系

一番直系に近い分家としては佐野家があげられる。

炎だけは

明確に等級づけされていて普通の炎 > 黄金の炎（浄化の炎） > 神炎

血の靈気を織り込んだ最高峰の炎で

今までには美月を入れても10に満たない。

美月の神炎は

朱金色で

太陽のよつなことから

紅炎またの名をプロミネンスと呼んでいる。

神名家

影の五代天皇家の一つ。

（他は炎術師の離桜、雷術師の神無月、地術師の大道寺、風術師の如月）

水術師の本家。

80年程前現世では滅びた。尺魂界では元四大貴族で33年前滅びたとされる。

代々零番隊隊長を宗主が勤める。

美月達の母が元零番隊隊長神名葉月

高確率で双子が生まれ、一人は引き離されて育てられる。

ところのも、神名家はある呪いを受け継ぎ、その呪いに対抗するために、術を用い、双子の片方が呪いを受け継ぐようにした。

一人の母である葉月は、一つにわかれた受精卵が結合し1人で生まれてきたので呪いを受け継いでいた。

呪いや神名家に伝わる刀については未来編最終ページにて  
瞳の色について

炎術師の本家「雛桜」及び分家では、一番強いのが濃い朱。で暖色系が多く、橙や赤紫、ピンクなどで占められている。

雷術師の本家「神無月」及び分家では、一番強い力の持ち主は金、他は明るい茶色や、オレンジ等がもっぱら

水術師の本家「神名」及び分家では、藍色もしくは紺色で、藍色のほうが力が強い。濃い青系です。

風術師の本家「如月」他分家では、水色が一番力が強いほうで、より透き通ったほうが力が強い。ほかは薄い灰色や茶色

地術師の本家「大道寺」および分家は、濃い茶色やオレンジ、少ないが緑である。

緑が一番強いといわれている

## 葬儀の違い

精靈術師の家系は葬儀屋とかは呼ばないし、お墓も作りません。

一族ごとに決まっていて

自らの仕える神の御元へと還るため

風術師は本家地下にある風の力が溢れる微生物の一匹もいない部屋に死体が朽ちるまで（風化）

地術師は本家地下に半分弱埋められて、地に還るまで水術師は同じ一族のものに作られた氷の中へ葬られ

雷術師は一族が絶えず、力を注いだ雷の間で

炎術師は本家地下の炎の間で

どの葬方も肉体に宿る血の力がなくなるまで死したときのまま腐敗もしない

（どこも微生物がないし存在できない）のため1ヶ月でなくなる人もいるし

逆に十数年かかる人もいるちなみに明良を含めた美月達は未だ変化一つない

多分明良は分家ながら強かつたのであと十年は  
美月達は歴代最高だし、前世に始祖がいるので

数百年単位必要かもといつかいる。ちなみに始祖はまだ残つてゐる。

だつて仮に火葬するとして炎術師なら死んですぐは燃えないし、水術師なら燐るし、地術師は足が地についていたらすぐ燃えても治るし、風術師はなんかありえないことに空氣の膜で覆われるし

困らないの雷術師のみ

ちょーっと不自然に静電氣発生するけど（全然大丈夫じゃないってー）

単語説明　　出でくるたび更新予定

怨靈

ギリギリ虚ではない

かなりのレベルになると自分自身が虚になるのを

無意識に避けている

また魂葬も簡単でなく、下手な虚より達がわるい

が　虚のようにレーダーに反応がないため

100% 生者の術師等に倒される。

登場人物 その1 月ヒロイン 難桜 美月（前書き）

イラストはサイト内にあります。ここにはありません

登場人物 その1 月ヒロイン 離桜 美月

原作の年（一護が高一）は2007年とする

離桜美月

1991.4.3生まれ

享年13歳

炎術師の家系の直系

離桜家の長女であり、卯月の双子の姉。

13歳の5月末、虚との戦闘で死亡

その時 十番隊隊長日番谷冬獅郎に助けられる

その後すぐ斬魄刀を生み出し、死神として働くことになる。

その時は十番隊三席。

その後同年1-2月、呂解が使えることがばれ

零番隊（正式名御廷十三隊直屬特別部隊零番隊<sup>レイ</sup>）隊長となる

靈氣の色・朱金

生前の髪の色・黒

今の髪の色・朱

瞳の色・朱

身長・145?

体重・30?

血液型・A型

相手・日番谷冬獅郎

詳しいことは第四章で話すが前世の記憶があり

その記憶のためか、過度に周りが傷付くの良しとしない

鋼や狩人（同姓同名）、復活（水無月楓）連載ででてくる主人公は、  
パラレルワールドの彼女。

詳しい前世はかなしき物語で

またパラレルワールドの自分との記憶は共有している

前世の罪で

時間と空間の扉の守護者

になっている

斬魄刀

? 朱夏  
シユカ

始解：炎よ散れ朱夏

刀が炎を纏い、炎を操る

卍解：卍解火輪朱雀  
カリンスザク

七星の力を使う。

朱金の炎を放つ大きな朱雀が現れる

鬼宿：タマホメレーザー状の炎（黄色）

柳宿：ヌリコ炎の球

星宿：ホトトリ炎の刀

翼宿：タスキ鞭状の炎

軫宿ミツカケ：幻炎（紫）

井宿チチリ：盾の炎（白）

張宿チリコ：空間を断つ炎（青白）

元々は美月の守護精霊

具現化：緋色の中国風の服を着た美月によく似た10程朱髪朱瞳（  
美月より薄い）の少女で口調が古式。

中国で南を守護するという神・朱雀。

炎を司り、雛桜家に力を与えた張本人。

「我はお主の言葉に従う。ただそれだけだ」

つかは羽のような形。

卯月の斬魄刀藍珠の対

?癒宇イウ

始解：癒せ、癒宇

青白い光で癒す。内部を治す時、刺した方が治る。

卍解：○？（里）以内の全ての人を治せ、卍解治癒空間

完全治すには長時間必要

薄い朱い霧にその空間が覆われる。

具現化：白に近い銀髪に碧瞳の女で背中に片翼

元戦いと癒しと愛を司る大天使。

「もし自分が死ねば皆が助かるなら貴女ばぞうしますか？」

つかがない懐サイズの刀  
持つ所には「癒」の字

サブ主人公その2の臯月の斬魄刀宇紀癒の対

？刹那セツナ

始解：血に飢えろ、刹那

刀身が血色に染まる

キーワード、切り刻め”ということで刺した対象を木つ端みじんに

卍解：血を浴び、悪夢を見せろ、卍解永遠ノ悪夢

昏い空間に傷付けた敵を閉じ込め、精神が壊れる

もしくは美月の許可を得るまで出られない

両刃の剣で、搖るぎない殺す覚悟を持たないと

美月自身が傷付く。

具現化：黒髪緋瞳の男で全身黒づくめ。

ひどく好戦的で戦闘狂に近い

左目に大きな傷跡がある

「人を殺す覚悟お前にあるか？」

黒の柄から白い布がでている。

朱夏以上斬月未満の長さ

卯月の斬魄刀琥珀の対で、神名家に伝わる宝剣の一つ

その他

誰にでも愛される子恋愛」とこは涙もらい。

しかし、意志が強く、喜怒哀楽の激しい子。

しかし自分の恋にはうとい。

いろいろいろいろに遭おうとも人を愛せる。

が若干男が苦手。（えつ）

（これは本人達しか知らないことだが、異母兄・響「父の前妻の子」により、小学4年から6年の中頃まで性的虐待を受けていたしかも兄1人だけではない）

彼女本人もショックと兄の術で忘れていたが、心の奥底や体が覚えているし、日記で見知っている。

10までは前世の記憶はうつすらとだけだったが、皮肉にも上をきつかけに全てを思い出す。

IQ300以上の持ち主で

アメリカのハーバード大学の理数科と医学部の終了資格をわずか6歳の時半年で取っている。

イメージは赤薔薇か桜。

また12までピアニスト兼作詞作曲家”ナナ”として名を挙げる

左手にガーネットでできたブレスエットをしていて  
これが靈圧制御装置  
8割を封じ込める

だが残り2割の状態でも  
隊長格の1・2倍の靈圧

つまり

全靈圧は隊長格6人分  
しかし靈圧制御装置をつける原因は  
体が耐えられないため。

また、完全に靈圧を解放すると  
額に朱雀の刻印が浮かび上がる。

登場人物 その2 太陽ヒロイン 雛桜 卵月

原作の年（一護が高一）は2007年とする

雛桜卯月

1991・4・4生まれ

現在16（原作初期時） 18（死神代行消失編）

空座高校1年3組 3年（石田と同じクラス）

一護とはクラスメートで小学校からの友人

様々な武道大会で優勝していく、

一護やチャドより

100倍強い。（死神前段階で）

雛桜家の次女で次期宗主。（20代め）

月ヒロイン美月の双子の妹

姉が死んだのは自分のせいだという自責の念を抱き、また魂の無事を信じたいと思っている

靈氣の色・藍碧の靈氣

髪の色・（通常）黒色

（靈体）藍色

瞳の色・藍色の瞳だがカラー・コンタクトで茶色にしている

身長・160?

体重・40?

血液型・A型

相手・石田雨竜

美月、サブ主人公3人組とかかわりの深い切つても切れない前世の  
絆を持つがまだその記憶を取り戻していくなくて

少しずつ思い出していく。

第一章中

パラレルワールドの記憶の共有は完全に思い出した後

靈界の扉の守護者

斬魄刀

？  
藍珠  
アイジュ

始解：水氷に舞え、藍珠

水のように様々な武器に変化する

卍解：卍解玄武水氷陣珠

水の玄武が出現して、水の球を操る

凍結（水色）

変幻自在（透明）

癒し（白）

幻（緑）

溶解（黄）

もちろん普通の水の球あり

卯月の現守護精靈

具現化

藍色の中国風の服を着た卯月に顔立ちのよく似た藍髪藍瞳少女

中国で北を守護する神・玄武。

神名家に力を授けた張本人やはり古式な口調

「お主は一体どうしたいの、じや」

外見

つかが雨粒の形

長さは朱夏と同じくらい

美月の斬魄刀・朱夏と対である

? 琥珀

始解単解とともに不明 まだきめてない（決め次第更新）

具現化

ぴちぴちピッヂのミケルそのまんま

蒼翠とも彼女に言われる。

碧銀の髪に紫の瞳

外見は刹那と正反対で白い刀身柄で柄からぐる布は黒  
長さは小太刀コダチ

美月の斬魄刀：刹那と対である

その他

裏表がある子。

（4人よりも）自分のことはどうでもよく、自分のせいで誰かが傷つくるを恐れる。

恋愛対象として男はあまり好きではなく、（女が好きと言つわけではなし）ナンパ男への対応が一番酷い。

完全に思い出すのは、2章中だつたりする。

IQ200

ハーバード大学体育科なかつたいじゅぎょうをトップで卒業かつ体育の国際教員免許を8

歳で半年取つた。

美月とともにコンクールで何度も優勝。

”ナナ”の双子の妹”ナミ”ヴァイオリニストで歌も少々。

現在は歌手を波音ハノンとして。

イメージは水仙か蓮

蒼いサファイアでできたブレスレットと髪飾りをつけていて  
それは靈圧制御装置。

これにより8割強の靈圧が封じ込められている

完全に封じた靈圧を解放すると

右手の甲に玄武の刻印が浮かび上がる

紹介はまだまだ続く… 長い

## 登場人物 その3 サブ主人公 3人衆（前書き）

姉御肌で、胸でかめな、派手系美人なサブ主人公1  
毒舌敬語系、大和撫子系なサブ主人公2  
兄貴系中性的美人なサブ主人公3  
です。

登場人物 その3 サブ主人公 3人衆

サブ主人公その1

神無月由宇

享年15

1987.10.10生まれ

元三番隊三席  
現零番隊四席

姐御肌な性格で  
男女にもてる。

靈氣の色：黄色がかつた白金・金色

髪の色：（今）金色  
（生前）金茶

瞳の色：金

身長：165？

体重：45kg

血液型：O型

相手：吉良イズル

主人公と同じ

死んだとき前世を全て思いだした

魔界の扉の守護者

斬魄刀

? 雷霸

始解：雷をあげる、雷霸

外見変化せず、雷を操る

卍解：四方よりまじわる、卍解青龍雷輪

青白い電気をまとい金の光を放つ青龍が現れる  
始解のパワーアップ

元由宇の守護精霊

具現化

金髪金瞳の黄色を基本にしたミニスカ中華服を着た10程の由宇に似た少女

中国で東を守護する神・青龍

「じじうかの由宇」

迅雷の方が短い  
迅雷とは対

?迅雷

始解:集え、迅雷

外見変化なし、雷霸より弱く、微妙な調節にたけている。

卍解:卍解紫電一閃

雷をまとう鳥雷鳥が現れ、その羽根は当たるだけで大ダメージ。

始解のパワーアップ

由宇の元守護精靈

元を正せば、異母兄・日向陽の守護精靈。

具現化

20くらいに見える蒼銀色の髪に金色の瞳の男性。

「ちやつちやと終わらせよ」主

雷霸とは対  
雷霸の方が長い

その他

公私を分けている

零番隊の苦労人。

イメージは薔薇か向日葵。

愛つて何かわかつていながら心がそれを認めない

天才若手女優”唯”。

12～25までの役を10の時から。

出演したものはどれも好評

話題の名作”朧月夜”での幽靈”アリサ”役や  
”天使のつばさ”では第一シリーズでは妹の聖良、第一シリーズでは  
は姉の怜良等5年前のデビュー当初から  
天才子役の名も期待の若手の名も様々な声も総なめにしている。

政略結婚な両親で父親も母親も愛人作っているし、夜遊びはするは、  
な最低ども

兄弟仲は最悪

全員片親違い。

名字は一緒だから、怪しまれないよう別々の学校に通つてたけどさ  
名前なんて全然気にしなくてもいいよ

一番年上のが12歳も年上の異母兄・充<sup>ミツル</sup>

次に10年上の異母姉・艶香<sup>ヨウカ</sup>

つづいて

5つ上の双子の異母兄、実と旬<sup>ミフル シュン</sup>

でこの後に生まれたのが

由宇

由宇だけがこの夫婦本来の子

由宇が生まれた後はもうこの夫婦離婚していないだけでもう悲惨

悲惨

上の兄姉みんな母親違つ

で下に

2歳下の異父妹・愛  
4歳下の異父妹・恋

6歳下の異母妹・絵依

6歳下の異父妹・憂<sup>ウイ</sup>

8歳下の異母弟・昭夫<sup>アキオ</sup>

9歳下の異父弟・治  
10歳下の異母弟・昭継

12歳下の異父弟・健

母親が生んだのは全員認知せざる得なかつたけど、

父親はそこらじゅうで種撒き散らしてたらしく（下品ですまん）

靈圧制御装置は、シルバーアクセの  
ブレスエット  
左手につけていて、完全靈圧解放すると、左腕に青龍が浮かび上がる。

サブ主人公その2

大道寺 皐月

享年16

1987.5.5生まれ

元四番隊三席  
現零番隊三席

毒舌腹黒ですか

言ひことは正しく、

実は優しいお姉様

靈氣の色・白がかつた緑

髪の色：（今）碧  
(生前)茶

瞳の色：緑

身長：160?

体重：43kg

血液型：B型

相手：檜佐木 修兵

主人公と同じ

しんだ時に思い出した

天界の扉の守護者

斬魄刀

?花音  
始解：惑わせ、花音

卍解：咲き誇れ、幻音を聞かせよ、卍解白虎百花繚乱  
土の力や植物の力を使う

花の香りを使い、さまざまな効果のある香りや、薬を作ることも可能。

皐月の元守護精霊。

具現化

碧瞳碧髪の皐月にそつくりの外見だが毒舌は控えめな10程の少女。

中国で西を守護する神・白虎。

「何してゐのやつたと行きますよ皐月」

柄に飾りひもがついていて始解の時縁にかわる。

海依の斬魂刀・地生の対

? 宇紀癒

始解：力を与えよ、宇紀癒

卍解：命の息吹を、卍解昇天癒紀

ともに癒宇と違い、体の傷を治すのではなく、靈力を回復させる。  
(自分の靈力を相手のに変換)

卍解では、満遍なくだが、1人1人に対しては、始解のパワーより  
ダウン気味

具現化

黒髪碧瞳の癒宇にそつくりな少年。

同じく片翼を持ち、元癒しを司り天界の番人補佐であつた天使（  
皐月の部下）

「また貴女と戦えるなんて光榮です皐月様」

西洋風の普通のサイズの刀

癒宇の対

その他

腹黒、毒舌、敬語キャラ。

だが優しく、少し弱い。大人。

人は汚いものだと悟つてゐる。

間違ひなく男を尻に引くタイプ。

美月達のお姉さんかお母さんみたいな。

冷静に見えるが、激情家

イメージ大樹か薔薇の棘

裁縫等がとても上手く、料理に至つては若干1-2歳でプロの料理人の資格を取り、

和洋中伊等を幅広く着手していてまた日本一の高級旅館「梓」の女将・月夜として働いていた。

靈圧制御装置は首の十字のネックレス

完全靈圧解放すると、胸元に白虎が浮かび上がる。

サブ主人公その3

如月海依

享年15

1988.2.2生まれ

元一番隊副隊長  
現零番隊副隊長

男前で中性的

髪が長いのに文物以外着ていると男に間違われる

もじくはなどちと言われる

靈氣の色・碧や水色がかつた銀

髪の色：（今）銀  
（生前）黒

瞳の色：水色

身長：170？

体重：47kg

血液型：A B型

相手：碎蜂

主人公と同じ

しんだ時に思い出した

妖精界の扉の守護者

斬魄刀

？風華

始解：風よ我が声に応えよ、風華

うすく刀身に龍が浮き出る

亐解：黄龍迅風華遠

水色で銀の光を放つ黄龍が現れる

元海依の風の守護精靈。

具現化

海依にそつくりだがこっちの方が若干女らしい。

銀髪水色の瞳で中国服着用。

中国で中央を守護する神・黄龍。

「行こう主様」

風車のようなつかの形

?地生

始解：地の力を我に、地生

亐解：地竜五行地ノ章

土色の竜が現れる

元海依の地の守護精靈

具現化

茶髪茶瞳の筋骨隆々とした男

「せつせとしろ海依」

小太刀ほどの刀

花音の対

その他

恋愛に関して男大嫌い。

というより前世は男女すごい半々なせいで性への認識が薄い。

イメージは白か蒼か水色の薔薇。

またその姿をいかしたモデルで主に男装モデルと変幻自在に声を操る凄腕のベテラン声優として、

モデルは12くらいから声優は8くらいから活動している。仕事名は戒。<sup>カイ</sup>

5歳年下の異母弟・風がいる。

術師の本家大道寺家の娘と如月家の現当主の間に生まれた。

珍しい術者同士のハーフ。

後妻に嫌われてた。

左手人さし指につけている指輪が靈圧制御装置

完全靈圧解放すると、黄龍が左手の甲に浮き出る。

## 5人衆についてと零番隊（前書き）

サブ主人公三人衆と双子の共通点とか、零番隊について… 等々

## 5人衆についてと零番隊

靈圧制御装置について

つかわれている宝石は  
元々は靈石と化した真珠

術師の属性により、宝石に変わる

炎 ガーネット

水 蒼いサファイア

雷 トパーズ

地 ペリドット

風 アクアマリン

強い力を封じ込めるために使い、通常力の制御できない幼児のころからつける。

が5人の場合は

普通の人「一族分家」が玉ひとつ

普通の直系3～4で完全に押さえ込めるが

10人の玉づけても

8割までしか封じ込められなかつた。

「 これ以上付加できない」

10までなら

玉を濃縮し1-2分の大きさにできる。

そんな5人の

共通点

- ・自らを突き通す
- ・心に傷・過去を乗り越えている
- ・裏切り=なくならない
- ・しかしなくなつてほしい。

・・肌でなく魂に刻まれた刻印

ヒロイン達の設定 +

義骸を使わなくても、靈圧の調整や構成で実体化できる。

（死神ヒロイン達やオリキヤラはもちろん、灰側ヒロイン、魔法側ヒロインも、）  
イコール

義魂丸を持ち歩いてもない

## 語学力について

日本語以外に

海依や皐月、由宇ができるのは アメリカ英語、中国語、フランス語

卯月はそれ + ドイツ語

美月は卯月 + イタリア語、イギリス英語

である。

(＝美月は、依、独、英、米、日、中、仏の七か国語しゃべれて、

卯月は - 伊、英

あと3人は - 独である)

零番隊

正式名御廷十三隊直属特別部隊 零番隊レイ

隊花 薔薇

意味「うつろい行くもの

様々な色シキ

隊長羽織（裏） 紅クレナイ

副隊長章のようなものが

隊長以外全員にある。

→ 五席まで後に 四席 金

後の席官銀

で出来ている

零番隊的虚ランク

S × 5 破面ゼロナンバー 1 → 7

S × 4 上の 8 → 15

S × 3 上の 16 → 25

破面 1 → 5 エスパー・ダ

ヴァストローデ

S × 2 6 以降の エスパー・ダ

ヴァストローデ

S それ以外のアランカル

AA アジュー・カス

A ギリアン 巨大虚

BCD 普通虚

死神でいうと

隊長格は全力で S × 3

零番隊の美月・海依・皐月・由宇は全力で S × 5 と互角程度。  
副隊長は隊によるが SS (恋次) から AA です。

一角さんばなし

かな

せなみに

零番隊の5席以下はSSS弱

## 六番隊二席はSSS弱

精神状態に大いに影響される

なお等間隔空くのでなく

王族特務は零から参番隊まである  
ゼロはレイとほとんどメンバー同じ

壹番隊 - 隊長山吹  
空羽 クウハ

副隊長：青木輝

式番隊・隊長二上  
馨 カオル

參番隊 - 隊長佐野

# 原作50年前の佐野家当主

輝以外いざれも原作時から今まで一緒に

(まだ、名前しか決めていませんが

詳細が決まれば

つけたします、次話に)

## 他オリジナルキャラ

オリジナルキャラ

? 青野 輝

享年 17

死因 親による虐待

虐待理由 異能

家族（生前の）両親、妹（14下の）

元六番隊副隊長兼現零番隊五席  
恋人に裏切られた過去をもつ。

心を美月に

体を藍染に救われた過去を持つ  
美月の願いで空座町で、高校生として潜入  
二章で彼女が選ぶのは……  
藍染？ それとも美月？

身長：155？

体重：45？

血液型：A型

誕生日：1/2

髪の色：黒 瞳の色：オレンジ

靈気の色：オレンジ

言霊 割魄刀

始解：虚を現に、現を虚に、言靈

瞳がオレンジから金に変わる

効力範囲は刀を中心<sup>ムゲンノコトハ</sup>に半径50?

卍解 夢幻ノ詞

どんな言靈を現実にする  
また効力範囲は半径2?  
だが、理に関する ことは  
代価を必要とする

### 具現化

10? 程の妖精で白髪黒瞳。

「ちょっとーしつかりしてよ輝私はあなたが何を選んでも従うから」

?須王 修宇

元十一番隊四席

現零番隊六席

第三章で五席に

見た目 20前後

髪の色 : 灰色

瞳の色 : 黒色

身長 : 175?

血液型 : B型

体重 : ?

誕生日 : ?だから初めて魅と会った日である3/10

靈氣の色：白

冬獅郎とは同期で、まあまあ良好な関係だったのだがある」とで険  
悪に

草冠とも知り合いでいつも一位日番谷 二位 須王 三位 草冠

魅とは幼なじみ

更木出身

斬魄刀

光神

始解：貫け、光神

光属性なので、太陽が出ている時最も力を發揮

卍解は魅と合体卍解

カミシロ  
？神代 魅

元十一番隊三席  
現零番隊七席

第三章で六席に

見た目：20前後  
髪の色：栗色  
瞳の色：焦げ茶色

身長：165？

体重：？

血液型：O型

誕生日：修宇と同じ

靈氣の色：黒

桃達と同期

一回生で始解を習得

更木出身で、修宇とあつて世界に色がついた  
修宇が好き

マッドサイエンテストが大嫌い  
整形で見えなくしているがおでこに大きな傷。  
マユリの肉体強化の手術をうけた。  
そのため、身体能力は隊長格だが、体内などがついていかず、吐血  
することがある。

腕の傷は1回生の時の実習中虚に。

チヨーカーをいつも外さないのは下の手術痕を隠すため。左目視力  
が極端になく、  
流魂街時代から0・2と悪かったが投薬の影響で0・05にそのた  
め戦闘時眼帯をつける。右目は3・0  
零番隊章は腰に巻き付けていて、改造死霸装。

阿散井達と同期

斬魂刀

闇王

始解：全てをおおいつくせ、闇王

闇王

同様に月がでて辺りが闇で覆われている時最も力を發揮

合体卍解

卍解「闇夜ノ月光紳王」

？那智葵

零番隊八席

第三章で七席に

見た目12、3

髪の色：薄い亜麻色

瞳の色：茶色

身長：150？

体重：？

血液型：A B型

誕生日：7 / 20

靈氣の色：蒼

まだまだ新人の死神

明良とは同期。

流魂街にいたころ三席時代の美月 に様々なことを学ぶ。

そのため尊敬の念をもつ

実は 雛桜家の者らしいが生まれてすぐ死亡したため術はなにひとつ使えない

血筋上 〇〇の兄に当たる

斬魄刀

蒼炎

始解：炎く熱するものを全て無にかえせ、蒼炎

刀身を蒼い炎が覆う

氷水く蒼き力を蒼炎

刀の蒼ソウがいつそう色濃くなる一ヒつ同時に使つのは不可

卍解：蒼碧炎氷

水晶でできたような翼を持つ龍。天龍

中で炎が揺らぐので模様が動くように見える

具現化

藍に近い紫色の髪に赤紫色の瞳の三十路まじかに見える男性。美形。

実は蒼炎使い・雛桜彗。

水術師と炎術師のハーフ

「こやつは一応雛桜直系だぞ。産まれる前に死んだがのう」

？佐野 明良

六番隊二席

享年：13

髪の色：赤茶

瞳の色：明るい茶色いや、桃色

薄いオレンジにも見える便宜上桃色で

身長：153？

誕生日：8／23

血液型：A B

靈気の色：薄い赤 桃色

雛桜家の分家・佐野家の次男

美月、卯月、留依のはとこに当たる。

元美月の婚約者

美月を尊敬していて、初恋は留依だつたりする

毒舌マシンガントークの持ち主で、

顔立ちはそこらの女の子より愛らしい

初対面は十中八九女に間違える・・・

生前はサッカー部キャプテンであり、U-14に所属していた海依、

皐月、由宇、風と同じく

聖クロス学園に通つていて頭もいいのでSAだつた

サッカーのポジションはFW

これはネタバレだが

この世界のホイッスルの椎名翼である

斬魄刀

陽翠

始解：紅に染まり踊れ炎よ、陽翠

形状変化なし。

目に見えない小さな炎を起点に発する色は金と普通の深紅

二解：太陽炎輪翠彰（チリンエンリンスイショウ）

いくつもの廻る炎の輪

核が雪の結晶のような形の炎。

これが壊されない限り再生可能。

具現化

一見不良の金髪赤瞳野郎。関西弁

元守護精霊らしい

「おいおいしつかりしてくれーな姫さん」 でそのあと明良はいつもこう切れる「目が腐ったのかな、それとも頭かなこの馬鹿が」「そんなことゆつたつて姫さんは姫さんやかわいいかわいいの」

? 如月 風

サブ主人公3 如月 海依の異母兄弟にあたる。

如月家次期当主

本人は姉を大変したつていたが…  
周りはそれを良しとしなかつた

主に女モデルとして”宵”とこづかで活躍している  
また姉同様声優もやっている。

髪の色：黒

瞳の色：水色

誕生日：1992.12.10

身長：155

未来は170

霊気の色：水色

血液型：A

風術師で如月の次期当主

？雛桜 留依

美月や卯月の従妹にあたり、  
明良のはとに当たる

敬語をよくつかい、おじとやか。  
おかげで頭が印象的。

いちおう声優で”朱炎”の名をつかう。

髪の色：黒

瞳の色：赤だが薄い。濃いピンク

誕生日：1994.6.12

身長：150

血液型：A

霊気の色：赤紫

紳炎は使えない

。サブのサブ かも

?日向 陽  
ヒコウガ ヒナタ

神無月由宇の唯一兄と認めた異母兄

8歳上。

秋生まれ

髪の色：薄い茶色  
瞳の色：黄色

約8年前死亡

享年16歳

誕生日：1979.11.15

血液型：O型

身長：170cm

体重：60kg

自らの魂の片割れである守護精霊を妹に託したため、斬魄刀を持つていない。

流魂街にいる。

冬獅郎を拾つたおばあちゃんと暮らしている

靈力はあり、結界・縛術・鬼道・その他の術は使えるし、弱かつた体は、強くなっている

今のところ死神になるつもりはない。

?八城 初音

元由宇達のクラスメイトで妹のような存在  
見た目16、7歳

葵達のクラスメイト。  
茶髪茶目のかわいい系

原作時点では、四回生。

?煌 未姫

身長 : 160cm

体重 : 45kg

中国人と日本人のハーフ

冬獅郎や修宇と同時入学で、女名だが男

生前病弱だつたため、色白。

対人関係がダメダメ

でも実力はあつたようで、現在七番隊5席

見た目は16、7。

紺色の髪に、漆黒の瞳

## 第一話 我が名（前書き）

私は死んで死神となつた。

心残りがないといえば嘘となる。

それでも、別れてしまつた道が再び交わると信じて、私は歩き続ける。

愛する人と仲間達と共に

仲間を守つて死んで幸せとかそういうことは、考えない。

共に助かる可能性がどんなに低くても、

0%じゃない限り、

また自分がどれだけ傷ついても絶対に共に助かつて見せせる

こんな私を大切にしてくれる人のために

## 第一話 我が名

私はその死神・日番谷 冬獅郎に魂葬された。

### 第一話 我が名

「ヒヒが…」ソールンサイティ  
「死魂界。

なんか、あっちの方から大きな靈圧をいくつも感じる。  
なんかとても懐かしい感じもする。」

そう自分の世界に没頭しながら  
順番待ちを通り越し勝手に中へと  
自分の感じるままに歩いて行った

靈圧を感じるほうに。

だが、私は急にとまつた。

なんとなく嫌な自分に害を及ぼすタイプの靈圧を感じたから。

私はその辺にあつた石を拾つて、嫌な感じのする所に投げた。

すると下から大きな壁が現れた。

すべてを拒絶するかのよつたオーラを放つ壁が…

「やつぱりね。

外敵を退けるためのものの類ね…

でもこの向こうへといつたい？

守らなければいけないものがあるわけ？

それにこの靈圧…」

冷静に物事を推察する私こと雛桜美月。

「そこは瀧靈廷セイレイティだよ。」

突然の声に振り向くと、そこには少しわかめのおじさん。

「あなた…誰ですか？」

私が気配に気付けなかつたかなりの手練と見える人物

「そりやあ失礼。僕は享楽春水という者だ。」

それとは裏腹に飄々として軽薄そうに見えるその男が着ているのは、さきほどは気付かなかつたが、

派手な文物の上着の下にあるものは、死神の着る黒い着物・死霸装。それをみて少しは警戒心を解く。

全くの正体不明男ではなくなったから。

でも、私は、彼女は本能的な部分でまだ警戒していた。

「あなた、その服死神ね」

頭が痛い

なぜかくらくらする

「 そうだよ。

僕 :

私の意識はブラックアウトした。

おそらくは

生前の記憶を全く失わずに

この戸隠界にきたからも原因だった。

ドサッ

美月は倒れ

それを瞬歩でよった享楽が支える。

そして、いつ疑問を空へと溶かした。

「ちよつと暫ひ

氣を失つてるよ

対して靈圧があるわけじゃないのに  
靈圧をここまで正確に感じ取れるなんて  
いつたい何者なんだい」「

そういうつつ

御廷十三隊八番隊隊長である彼は  
彼女を抱え、瀧靈廷の中へと入つて行つた。

IN 八番隊隊主室

「隊長つ

どこにサボつて……

誰ですかその子

まさかわざりつてきたんじやないですよね

真面目そうな眼鏡をかけた20代半ば程に見える女性の死神。

「七緒ちゃん ただいま

」「の子?」

なんか靈圧ほとんどのこ

滝靈廷の外から靈圧を感じるとか言つてて

話してたら急に倒れちゃつたから連れていきました」

「何が連れて来ちゃつたですか  
」「の子の親御（義理）さんが心配したうどいするんですつ」

会話を聞いているだけで

享楽さんのいい加減れ

七緒さんの苦労がにじんでいる。

「仕方ありません

田を覚ますままで」「ここでおいてかまいません。

そのかわり、後でさつちり総隊長に事情を説明する」と。

そしてサボった分の仕事してくださいこね

冷たい眼差しで享楽をじりみつけた。

「ええ～

七緒ちゃん」

はつきりいって情けないことに上ない。

こうして享楽隊長は七緒さんの部屋と美冴を別室において仕事をすることになったのであった……。

美冴がいたのは

朱金色の炎につつまれた空間だった。

「ルルルは…？」

誰もいないその空間でその疑問に答えた声があった。

『ルルルはお主の心の世界じゃ。』

「ルの声は…朱夏？ なんで私は死んだのに」

それは美月にとって、大事な相棒の声

死んだ以上

もうじきばらくは聞くことがないと思っていた声

『やうじゅ』

しかし、この世界では、精霊術師としてのお主の守護精霊として存在しているのではなく、

死神としてのお主の相棒・斬魄刀として存在し共に戦う。

だが、お主の斬魄刀は我だけではない。

あと2本ある。その名前をみつけるのじゃ』

私は嬉しかった。

また再び朱夏と戦えることが

ともにいれることが

”今まで”で”彼女たち”の次に永く一緒にいたのは、  
まぎれもない彼女・朱夏だつたから。

それが私を再び戦いの中に誘うものだとしても…

それに無力で護れないことがどんなに恐ろしいか彼女は

”今まで”にずっと”体験”してきたから

「わかつた、朱夏。見つけてやろううじやない」

私の肯定の返事に対して朱夏は

『よし、ならば…』

朱夏の人型があらわれた。

緋色の中国風の服を着た美月によく似た

10程美月より薄い朱髪朱瞳の少女。

後ろには2人ほどいるが、見えない。

『まあ我はどくへにお主を認めておる。

”あの時”からの。』

卍解もできんひじやな。

卍解はおこないまた時間のあるときの夢の中でもなんでも教えるとして、

とりあえず、始解の時は、炎よ散れ朱夏　　の言靈を語れ』

卍解？  
始解？

はつきりこって死神のことは知る必要もなかつたから、

正直に朱夏に尋ねた。

「卍解？始解？なにそれ」

すると不思議そうに

『知らなかつたのか？  
説明しなかつたか？』

おいおい

いくら私でもしんだ後必要になるかもわからないうことは、手を出さないよ

たしかに雑学知識や専門知識は豊富に持つてゐるが、

とこりかこんなに卑く死ぬなんておもわなかつたしねえといつやうな思考のすえ

「朱夏私をなんだと思つてゐるわけ？」

私は”万能”じゃないんだからね

と言つのだった。

『斬魄刀には、2つの解放があり、最初の解放を始解、もう一つを  
正解といつのじや。

一般的に、卍解は始解の5～10倍の力が出せるのじや。

じやから使えるものは本当に少ない。

自分の斬魄刀の名前すら知らない者も多いよつじやからな。

のため、死神の隊長になる第一条件でもある。

力が使えないより使えるほうがいいじやるつむ主ことつては、のう

美月。

思い出すのは”前世”<sup>むかし</sup>の記憶の一つ。

自分の力の無さを

いやどんなに強い力をもつっていても使えなければ意味がないと思  
知つたときの記憶。

力が引き寄せる者もある。

だけど、

自分の無力に嘆くのはもつひんざりだから

だから私は・・・

「教えて、あなたが私に貸してくれる力のことを..  
あなたの力の最大限を私は引き出して見せるから」

『美月ならそういうと思ったぞ。

私の正解は朱雀七星宿の力を使う

まあ今はとりあえずここまでにしておこうかの。

今は始解で十分じゃらう

先にお主の事をあやつらに認めさせてやれ。

大丈夫じゃ

美月ならのう』

後ろから来た二人の姿がやつと見える。

一人は女。

白に近い銀髪に、引き込まれるような深い新緑の碧。白い衣がまぶしい

もう一人は、男で、左目に大きな傷跡がある

黒い衣に黒髪に血のような赤い瞳の攻撃的な殺氣を放つ人だった。

『あなたが美月?』

先に声をかけてきたのはの方だった。

「はい。

あの貴女が私『そつよ。私はあなたの斬魂刀の一つ。

あなたを認めるかはこの質問にいかに答えるかで決めさせてしまひ

私の納得のいける応えなら、私もあなたに力をかしましょひ』

『うやらめんどうさいのが嫌いなようで单刀直入に彼女は言つてき

た。

あなたの言葉に』

「分かつた。私も真剣に答えましょ

『では聞くわ。

『美月あなたは何のために戦つの?』

その言葉を聞いた途端、幼い頃から染みついた言靈が声となつて、  
口から飛び出す。

「我、すべての人が平穏を送れるよう、また  
時には人たることも忘れず、  
大切な人を守るために」

精霊術師としての理…

だが無意識に答えたようにみえたのが  
途中から一変し目に強い光が宿る。

『そう、

ならあなたは、大切な人のために死ねる?』

「それしか方法がないならするかも知れません。

でも、少しでも可能性があるなら、残される人の悲しみを考えて、

最後まで足掻きます。

大切な人も、自分も死はないそんな方法を見つけてみせるつ。

こんな私を大切してくれる人のために』

それは嘘偽りない言葉…

そして”前世”からの教訓

親しい人に残されるのがどんなに辛いか”覚え”ているから

『氣に入つたわ。

私の名前は癒宇<sup>イフ</sup>。

癒しの力を持つ者。

必要になれば、私を呼びなさい。

癒宇の背中から片方だけ右側に翼が生える。

「ありがとう、癒宇」

そして癒宇は姿を消した。

いよいよ美月は男に向かいあつた

彼は言つ

『俺は、朱夏や癒宇のようには甘くないぜ。』

お前純粋な殺意を持つて人を殺せるか?』

殺人

人を殺すことが悪いことだとかそんなこと言つつもりはない

人を殺すのは覚悟が必要

それが自分の心を削ることだとしても…

きれい」とで生きて行けるほど人は綺麗じゃないから

できる限り人は殺したくない

でも…

「それが大切な人や、自分を守るために必要なら  
自分の手を汚します  
(もう汚れているし)」

男は美月の答えに対し

『ハハハ

おもしれえ

とりあえず認めてやるよ

俺を呼ぶときは生半可な覚悟で呼ぶなよ

それでいいなら

俺を呼べ

俺の名は刹那だ』

癒字もそして刹那も消え、私と朱夏だけになつた。

朱夏が私にこいつ言葉をかける。

『美月、刹那を試しに使おうとか思わないことじやな。

刹那はわざと説明を省いたようじやが、

刹那は諸刃の剣。

少しでも斬るいや殺すことに躊躇いがあれば、自分にダメージが帰つてくる。

本当に殺したいと思つた時だけつかえ。

まるで私のしようとしあつなことを、先読みしたかのような言葉…

まるで私のしようとしあつなことを、先読みしたかのような言葉…

いや確かにすこしだけ試してみようかな～とは思つたけどね。

いや永年私とつきあつてないね うん

「わかつたよ」

そうして再び美月の意識は遠ざかつていった。

そして自らの心の世界から現実の世界へ…

紅い朱い光<sup>アカ</sup>が収束し、1点へと集まる。

朱い柄の普通と同じか少し長い刀と

反対に懷に仕舞えるほど小さい癒<sup>ヒツ</sup>という字が印字されている小太刀と

玄のつかで鎖にまかれた普通より長い刀<sup>クロ</sup>

美月によりそつかのように  
それはゆっくり下に落ちた。

彼女の半身、斬魄刀の誕生だ。

その一瞬高まつた靈圧の強さに、

隊主室にいた、八番隊隊長享楽 春水や同隊副隊長 伊勢 七緒 、

そして離れた一番隊にいた隊長山本元柳斎重國が

その部屋に集まる。

前者2人は、先ほど美月に大した靈圧がなかつたからの驚愕で  
後者はその靈圧の根っこがよく知るもつ居るはずのない者に似てい  
たため

そして、靈圧はおさまり、もとの抑えた靈圧のに戻つた。

そして少女は  
美月は目を覚ます。

自分の心の世界から現実へ

あたたかくて冷たい現実の世界へと

「 いじじじ ？」

あなた達誰？」

開口一番の言葉はそれだった。

「 潤靈廷内だよ。

僕は言ったよね。

この子が僕の副官の「八番隊副隊長の伊勢七緒と聞こえます」……だよ

「 わしは一番隊隊長兼總隊長山本元柳斎重國じや

おぬしの名前は？」

「 私？」

私の名前は雛桜美月

生前精靈術師でした。」

その美月の言葉に納得したように笑う山本總隊長。

精靈術師…

同じ精靈術師の血を引くなら似ていてもおかしくないから…。

ああこれで決められたサダメへのトキが遠ざかつた…

「 そつか。精靈術師か」

隊長格なら精靈術師のさわりぐらいなら知っているし、総隊長は直系5家の名くらいは知っている。  
だからこそ嘘ではないと分かった。

「 それならいつまで靈圧を下げておくつもりじゃ？」

総隊長がやつと氣づくレベルだったので後2人は驚いた。  
「 あ、はーい」

美月は靈圧を上げる。だいたい死神でいう4席レベルに。  
(ハンターの”念”でいうなら、絶からつつすーい纏に)

「 これでいい？」

「 山本総隊長さん？」

「 ( 4席レベルか) … それで全力か?」

「 そうとわれ

彼女は考えた。

›

本当のこと言つていいのかな？

ぶつちやけ1割弱くらいなんだけど。

封印状態で…

「うん」まかすの決定ー  
なんかいやな予感するし

へ

ところの興合だ

封印状態といつのはまた追いつて話をつけ。

「やあどうかな」

「まつ 1割のひ」

年の巧で読み取られたよつで

思わず美月は天然で黒化する…

「天然だから恐ろしいー  
バーイ 月」

「心読まないで（微黒笑）

やつじやないと田潰れちゃうよ」

はつ毛りいつて恐い。  
のだが飄々と

「細かいことを気にするな。

さてどこの隊の3席にでもあるかのひ。」

まさに年の功ほどに厄介なものはないのだ…

## 第一話 対面

隊長、副隊長が集まつた一番隊隊主室。

一の描かれた扉が全て集まつたと同時に閉じられる。

まあ並の靈力の持ち主なら間違いなく倒れる。

こんな中で決めることがなるなんて

メンドクサ（えつそじゅ・びく）

ハハ 山本総隊長殺してえ（黒）

一話 対面 じいの隊に？

「今日集まつてもうつたのはのつ

今呼ぶ子をじいかの隊の3席こじてもうつと黙つてな

それに対し

「 「 … 」 」

な(反)応の六番隊隊長・朽木白哉と五番隊隊長・藍染惣右助(なんか  
胡散臭い)、(美月)

「 バカバカしい。必要ない(海依だけで十分だ)」

ある意味海依が好きだなあと思わせる一番隊隊長兼隠密機動総司令  
官・碎蜂。

111

「 つけは無理だ。  
もう3席は2人いるし」

と十三番隊隊長・浮竹十四郎。

「 そんなコト力ネ。  
人によるね」

といつマツドサイエンテスト  
いや十一番隊隊長兼技術開発局局長の涅マコ(

「 どんな子やねん。  
可愛い子なら欲しいわあ」

と訳のわからない感情を読ませない三番隊隊長・市丸ギン

「つちも無理そうだねえ  
(可愛かったのに)」

残念そうにいう八番隊隊長享楽春水。

「隊長の言つ通りね  
(結構優秀そだつたのに) 欲しかつたですけど」

と伊勢七緒さん。

「治癒靈力があるなら、欲しいわね。」

四番隊隊長・卯ノ花烈が。

「人手不足だしどつかの誰かさんがよくサボるから欲しいな」

と十番隊隊長・日番谷冬獅郎が

そう、あの時の少年だ  
美月を助けた

「「「あいにぐら席が頼りになるのでね（だよ）」」

と七番隊隊長・駒村左陣と九番隊隊長・東仙要

そして三番隊副隊長・吉良イヅルが

「強えのかそいつ」

と十一番隊隊長・更木剣八が

それに続いて副隊長・草鹿やちるが

「劍ちゃんが欲しい子ならあたしもほしーい」

と。

「「「うんな子（だらうね）」」

と口痴谷いわくどつかの誰かさんの十番隊副隊長・松本乱菊と

五番隊副隊長・雛森桃が。

「「隊長（マコリ様）と回じで」」

と四番隊副隊長・虎徹勇音と、十一番隊副隊長・涅ネームが

「「俺達もツス」」

と仮六番隊副隊長・阿散井恋次と  
九番隊副隊長・檜佐木修兵が。

一一番隊副隊長は今回体調不良で休みだ。

「早く紹介してくれませんか。」

と冷たい声で、七緒さんが言つ。

「まあいいじゃろ

入りなさい

いや入りこくいじゃろうから八番隊副隊長連れて来てもううるかの」

そして

彼女こと雛桜美月のもとに来て手を引く。

まあ無駄な抵抗をしつつ

姿を表した。

まず彼女の容姿や格好に皆驚いたようだ。

格好は現世の制服。

年は口番谷隊長よつは年上だらつゝー、4歳ほゞの年格好

髪と瞳の色は朱。

阿散井より明るくてまた心なしか炎のよう

髪は長くておだんじ頭。

顔立ちは可愛くて綺麗だ。

見た目で判断するなだらつが3席に命じられたるよつて見えない。

しかも

全員（何人か除く）「「「「「（それに靈圧を感じな）」」

「「「「

とこつよつに思ひのち無理はない彼女が靈圧を制御し、すべて閉じ込めているからある。

ちなみに不真面目にも

「（かわいい子やん）」

と考える市丸に

「（昨日のやつか？

いやでも魂葬したばかりだぞ。

他人のそら似か？）」

とかんがえる田番谷。

「（やっぱりかわいいな。

それに靈圧隠してるのがわかんないよな。やっぱり制御能力はなか  
なかだよねえ）」

とかんがえる享楽さんである。

まあ総隊長でさえ違和感を覚える程度しか不自然な点はないのだ。

ふつうどこかに乱れが出るはずだから

ちなみに今感じじることのできる靈圧はほほないに等しく、徒人同然  
なのだから。

「雛桜美月です。

ほどんじゆうのくわじじに連れてこられました。

もわんやるからには精いっぱいにやられました。

と怒氣を少し孕んだ声でいつ。

総隊長は飄々といつ。

「ほほ

美月そろそろ靈圧を抑えんでもらえるか。

それに斬魄刀をもつてこんか

残さずじやべ。」

しぶしぶと美月は取りに行き

斬魄刀を3本も持つてきながら

靈圧を3席レベルへと引き上げた。（赤子をひねるほど簡単よ b  
γ美月）

驚愕の視線が集中する。

それもそのはず。

普通死神は一本

しかも席官以外は浅打のものがほとんどだ。

今現在例外は3人のみ。

今日欠席の一番隊副隊長 如月 海依

三番隊3席 神無月 由宇

4番隊3席 大道寺 韶月

だけ。

しかもその3人でさえ2本。

また、美月が持つ斬魄刀のうちの一本は普通より一寸ばかり長い。  
(斬月より少し短いくらい)  
(一本は逆に短いが)

斬魄刀の長さは靈圧の大きさ。

しかもここまで靈圧制御がつまごといつゝとは、これが限界値だと  
いつことだから。

「あつ 田舎谷君ー？」

周りを見回しているうちに、美月は彼に気づき指を指した。

「何じや知り合いか？」

「・・・やつぱり昨日のヤツか。  
ガキの癖に妙に悟った眼をしゃがつたヤツ」

「あー ガキにガキつていわれたくないんですけどー  
昨日もさつきもいつたけど雛桜美月って名前がちゃんとあるんです  
ー」

でも・・・

隠してたことに彼は気づいたんだ

私のもつ闇に・・・

完全じゃないけど

過去のせいでどうか 自分がつらじ田にあつて当然と思つてゐる」と

…

だから興味を持つた。

そしてその意思の強い瞳も

まあ

俗に云つて「ほれつてやつて近かつたなつて、この時を通り出  
して私は思つた

「ペいつ

やめんか

田番谷、雛桜もな

狐目隊長が言つ

「説明してくれへん?

なんで十番隊隊長さんと知り合いなん?」

「昨日 魂葬してもらつただけです。

ちょっとミスつちゃつて、大虚に殺されただけです。私、精霊術師なので…」

「そうやつたんか  
よかつたなあ」

胡散臭い  
うざい

だてに長年、記憶を蓄積していない  
生きていられない・・・

この人も、裏で微笑む五番隊隊長さんや、一見無表情の色黒さんも

怪しいと思つてしまつた。

信じてはいけないと

それを感じさせず、美月は言つた

「あの セッキーの会話から 2・3・5・9・12、13は嫌です。

歓迎されていないよ」です……」

「ほうワシ個人としては、6・8・10・11のビックには一つ  
でもらいたいのじゃが」

拒否権はなさそうだし、嫌なところは入っていない  
とくに胡散くさいあの人たちの隊じゃない安心だ。

「できれば体験してから決めたいのですが……」

「では6番隊から順に 2日ずつでいいかの・・よいか、朽木」

「わかりました、ついて来い恋次」

「ほり来いよ、あー」

「雛桜でも美月でもどっちでもいいです。」

「雛桜。」

・

俺は、6番隊副隊長代理の阿散井恋次だ。」

「私は、6番隊隊長朽木白哉だ」

じーっと美月が見るのは副官章。

「これって椿

恋次さんに似合わないね。

もしかして隊の象徴？

アハハ

朽木隊長はピッタリだけど副隊長にあわねえー

だつてたしか有名な花言葉”高潔な理性”だよつ

似合わなすぎー」

冷たくて冷静そうなでも

心根は優しいんだろうなと思う田を持つ朽木さん

「うつせーよ」

不器用そうで直情型で猪突猛進そうな阿散井くん

まあ

少しはよさそうかな

おまけ

「人は見かけに寄りませんなあ」

「… そうじやの

それにしてもあの子によくことる」

続く・



## 第三話 4つの隊の3席体験 輝の救い

第三話 4つの隊の3席体験 輝の救い

IN六番隊

「今日明日だけ3席としてお世話になります

雛桜 美月です。

分からぬことが多いかもしけないが、

よろしくお願ひします。」

穏やかに

彼女は笑った。

さりげない動作

一昼夜ではできない振る舞い。

それは貴族出身の多い死神でもめったにみられないものだった。

(ちなみに特にこの六番隊には割合が多い)

「あの 杞木隊長。今日は何をすれば宜しいですか?」

(なんだー あの変わつた口との違い

同一人物かーー!?)

と思つのは 恋次だ。

「やうだな。この書類をやつて貰えるか?

今日中だ」

そう言つて渡されたのは、5?枚の書類の束

(た隊長新人にそれは……あんまりだと……) b y 恋次

(なんだこれだけかあ) b y 美月

「はいっ  
わかりました」

「口ッ

隊員全員が見惚れた。

それこそ老若男女問わず

それほど愛らしく綺麗な若千一、三歳とは思えない微笑みだった。

「 もうか。 よろしく頼む（ 実は結構気に入ってる ） 」

すいすいすいすい

あの量を僅か1時間半で終わらし

（ でも筆つて書きにくいね

まあ普通の子よりは慣れてるけどね

呪符とか書いてた時代もあるし<sup>トト</sup>

「 あ終わりました。 」

朽木隊長 確認お願いします。 」

しづらいへじて

「誤字脱字も間違いもない。これを四番隊へ

こちらを十番隊へ持つて行つてくれ。」

(ザツ

暴言隊長のところ)

あーあ

昨日の今日でこくの氣まずいよなー

うん

悪い人じゃないのは分かるんだよね

つてことでズルズル先延ばしにして先に4番隊に……

といひ変わつて4番隊・・・

「（たしか・・・

隊長が卯の花烈 さんつて女人の人で・・・

温和そうな人だつたな。

で、副隊長は 名前は聞いてないけど

背のすく高い人だつたよね・・・

失礼します

六番隊3席（空席だつたらしい）の

雛桜 美月です。

書類を届けに来ました

卯「入つてください」

「[J]の書類どこに置けばいいですか？」

卯「勇音」

副隊長の人が 書類を受け取る

「では 失礼 卯「ちょっと待つてくれるかしら?」

「はい・・

(あれなんか一瞬寒気がしたよつな・・・)

信じたくありません

こんな 優しそうな人がどす黒いなんて

卯「あなた 治癒靈力は使えます?」

「あー たぶん使えます

3本の斬魄刀のうち1本は治癒系ですし

卯「そう それじゃ 明日だけでもいいのでうちの隊の手伝いをしてくれないかしら?」

あれ? 疑問形なのに有無を言わさない雰囲気が・・・

「く 枯木隊長にお願いしておきます・・・

(話せば 枯木隊長は分かつてくれるよ うん

帰つたら 明日分も終わらねつ・・・)

卯「よろしくお願ひしますね」

極端に黒属性に弱い 美月であった。

（あーあ

次は…十番隊か

行きたくないなー

あの時は私もなりすぎたし

ていうか 靈圧からして 卵月と同じ水とか氷に関係ありそうよね

副隊長はたしか 巨乳美人さん だつたよね

とか考へていてるうちに十番隊隊首室前まで来てしまった…

はあ

「（副隊長だけだといいな  
）

六番隊3席の雛桜 美月です。

書類を届けに来ました

「入れ」

うわ  
いるし

「失礼します。書類はどこに置けば?」

さつかも思ったけど

悪い人じやないのも

怖い人じやないのも

冷たい人じやないのも

分かつてゐる。

彼の靈圧は、どこまでも冷たいと感じるけど、

普通はそうかもしれないけど

どこまでも 廣くて広くて そういうなつたの蒼穹ソラで氷空ソラ。

優しくて、どこか温かい

そんな 内面が感じられる。

まあ これは 永い永い活きてきた時間があるから分析できるって

いつのもあるんだけど・・・

だから ムキになってしまった私が恥ずかしい

「机に置いてくれるか?」

「はい」

机 というのは、隊長の机の上

今言わなきや さらにいづらくなる

そつ思つた私は

「ああのつ

昨日は すいませんでしたつ

失礼な態度をとつてしまつて・・・

「いや いい あの時は俺も大人げなかつた

大人げなかつたつて・・・(呆れ)

この見た目で言われても

言わないけど

よかつた　　彼に許してもらえて

“私”は決して赦されない十字架を背負つていると忘れそつこなる。

前世の“私”が犯してしまつた罪を

「あのつ　それで　「ちゅうとお茶して行きなをこよお」　えつと  
副隊長の「松本乱菊よ　よひしきくな」はまこ」

明るいすがる気がする。

嫌いじゃないんだよ

苦手でも　た少し弱いだけで

やつこつ間に　引きずりれていく私

「美月　つい名前だったわよねえ。

茶菓子はこる?」

「ははい（ないに比べたら）」

「いいのよ 敬語なんて」

「ううん」

約1時間は足止めされてしまった

田番谷隊長も忍耐強いよな

「すいませんっ 杣木隊長。」

あの乱菊さん 松本副隊長につかまつてしまつて……

それで 卵ノ花隊長が 明日私を借りたいといつていたのですけど。  
・

「かまわん 行け」

「あ ありがとうござりこましたっ

じゃあ 明日の分もやつておきますね

感じのいい笑顔を 美月はしていた。

かなり 栄木隊長は美月を気に入つたようだ

本人は気づいていないが・・・

仕事ができる

早い

気遣いができる

まあ 関係ないが容姿端麗で驕らないので、

隊員たちにも好かれている

・

本当の副隊長が、意識不明で今現在

阿散井恋次が代理を務めているが

彼は あまり書類作業が得意でない

そのため すこし たまりがちで  
定時過ぎまでかかっていたのだが

今日は 早く終わったのであった。

次の日

「やつぱり 朽木隊長許可してくださったのね。」

「（やつぱつ？）ま、い 今日一日頑張りますのでよろしくお願いし  
ます」

「今日は3席が休みの日ですから  
私が 勇音に聞きたいことはいつてください」

『患者が多数来ました

虚によつ、負傷。

すべて 十一番隊です。』

まわりの 隊員が嫌がっているのがわかる

なんだろう？

「11番隊……なら美月一緒に来てください」

「はいっ」

怪我をした隊員の前で言つ

「やつてみなさい

11番隊だからまわないわ」

黒い

黒い

まあ いつか。

めんどくせこから 霊力でなくあれで

「《キュア》」

傷は跡形もなく消えた・・・・

「今のは……治癒靈力ではありませんね

何をしたのですか?」

「うん？」

「……」まで 略式なのは私だけだけど、  
傷の周りの空間を隔離して、時間を戻しただけですよ」

「すごいですわね」

別次元だ

彼女の使う能力はそんな簡単で容易なものではない

同じような一族でも術式はある

だが、時間や空間に関するものは複雑怪奇

みつちりそれについて研究した者でさえ、数分戻すのがやつと  
また空間を隔離するなんて神業なのです。

使えるとしても陣や複数人数もしくは道具は必須なのです。

「そうだわ

「いらっしゃりに来てくれますか？」

貴女ならあの患者を助けることができるかもしれませんわ」

私が・・・?

私が誰かの助けになるなら何でもする

だから

ついて行った。

連れてこられたのは、姿形は自分より数歳上に見える女性が横たわる部屋。

「あの・・・の女性は?」

見たところ、外傷は適切に治療され、もう治りかけている。

「この人は今あなたが体験している六番隊の本当の副隊長  
青木 ヒカル 輝です。

約半年前、誰かとの諍いで腹を刺されてヤマはめましたが、精神的な傷が深いようで眠つたままなんです。」

「そうなんですか

## 閉ざした心

私にはいや“私”は知っている。

実際に 心が軋んだことも、閉ざすこととも知っている。

だから・・・

「私倒れると思っていますけど・・・

何の問題もあつませんので・・・」

「なにをするつもりです」

私は、そついいながら輝に近づき、  
額に手を置きながら

「こうするの 『インナーハート（心の中）』<』

人の精神世界へ入るための言靈

まあそれと同時に連鎖して頭に様々な術式を頭に描きださなければ  
ならない。

そして、他人の精神を受け入れるだけの器も必要だ。

ドサッ

私は、彼女の精神世界へと降りて行った。

斬魄刀がいる世界は精神世界の一部である

それだけがすべてではない

そこには真っ暗な暗闇であった。

あたりは歪み、1点の光もない

「ついた

ここが輝さんのインナーハート

輝さん 聞こえる？

『誰つ！？

私の世界に踏み込まないで

どうせ 私なんか必要ないんだから——』

「（おちついて、彼女の心を感じるんだ……）」

いつもいつも私を殴り蹴り暴力をふるつた両親

氣味の悪い オレンジ色の瞳

氣味の悪い、力

私の体に残つた煙草の焼痕

残つてしまつた青あざ

それでも私は死にたいとは望まなかつた

だつて 大切な大切な 私の妹

私が守つて守つて守り続けたもの

持つてしまつた

私と同じ異能

それを隠し続けて 妹使つたのを私が使つたことにして

いとしい愛しい私の妹

最後に私は両親に殺された

守つたことを後悔なんてしてない

でも私が墮とされたのは

南流魂街80地区 荒神

そこは 地獄だった

血濡れで、赫にまみれた世界

私は世界に必要とされてなんかいなかつたんだ

ひつしにひつしに 私は這い上がつた

そして死神になつた

私が生前から持つていたのは靈能力の一種と知つて私は安心したんだ

ああ 私は“化け物”なんかじやなかつた

そう思つた

大切な人ができる

私なんかを好きだと言つてくれる人ができる

幸せだと感じたの

でも それは仮初の幸せだった

私を襲つた絶望

彼がほしかつたのは 肩書き

副隊長の恋人という肩書き

愛してなんかいなかつたんだ

要らない

いらない

イラナイ

こんな世界要らない

哀しい

悲しい

憎い

痛い

イタイ

力ナシイ

世界がいらないなんて思いなんて私は

いや

“私”はよく識つている

大切な“妹”を殺されたとき

大切な“朋”を亡くした時

両親が“私”達双子を殺したとき

世界が神が“私”たちを見捨てたとき

この手が赤く染まつたとき

世界は、綺麗なだけじゃない

景色がきれいじゃないなんていうつもりはない

世界は醜く汚く穢れている

それは“私”が“私”達はよく識つている

人間は醜く、欲深く、傲慢で、嫉妬深く、弱い

だからこそ　自分と違うものを排除しようとする

ヨーロッパでの魔女狩りしかしり

学校でのいじめしかしり

それは　仕方がない

でも　それだけではないことも識つている

人の情、愛を

時にそれは権力に押しつぶされてしまうものであるけれど

「輝さん・・・  
いつか、あなたのことを思ってくれる人とも会えるわ　（“私”で  
も出会えたのだから）

淋しかったんだよね寂しかったんだよね

苦しくて憎くて悲しくて

でもね　貴女だつて私だつてこの世にたつた一人しかいない大切な人

【私なんか】 なんて言つちやダメ

屑なのは貴女を利用して捨てたその男

ねえ、殻を割つて外を見てみなよ、おいでござらんよ

貴女は一人じゃない

憎しみで支配されそうな自分が醜いなんてそんなこと思つちやダメ

いいの 憎しみを持つてたつて

人は 自分の中の齧い感情と闘つて

そこにあるんだからね

貴女はひとりじゃない

私がひとりにしない

私は味方だから

それに 枯木隊長も貴女を少なくとも副官として信頼してると思つ  
わ

『 なんで なんで

あなたはそんなこといえるの!...?』

「昨日ね 一日だけ六番隊の3席をさせてもらったの

阿散井恋次 という人が副隊長の代理をしていたわ

でもね 正式な副隊長はあなただと聞いたわ

意識不明になつて半年たつのにね

ふつう 信頼してない人をそのままにしておかないと

朽木隊長はそんな人よ

『そう・・・ね

朽木隊長はそんなことを』

「必要なのは 一歩ね

勇気をもつて・・・・・

れあ 私の手をとつて

そして

一いつの手が重ねられた

『ありがとう』

別に記憶を改竄することもできた

でも、経験はすべて 心の力だ

普通の一区分の人生程度は

私は目を覚ました

「つ

少し頭が痛い

倒れた時に打つたかな

「ん 卯ノ花隊長?

ここは・・・」

輝さんも目を覚ました

「おはようございます

青木副隊長

ありがとつ

「雛桜3席」

「おは・・ん? 雛桜3席? ?」

「【はじめまして】

今、体験で六番隊3席をさせてもらひつてゐる

「雛桜

美月です。

「

「IJの瓶・・・

あの時の・・・

ありがとつ 美月ちゃん」

「いえ 私の経験が豊富なだけですから ね」

オレンジ色の瞳を輝かせて  
やわらかく笑つた。



## 第四話 4つの隊の3席体験？ そんな彼女の実力の一端

第四話 4つの隊の3席体験？ そんな彼女の実力の一端

（エロハ番隊）

「今日明日お世話になります

雛桜 美月です。

よろしくお願ひします。」

苦笑いしつつ言った

顔が引きつる。

前来た時も思つたしかじこではないだとは違う仕事のための部屋  
の隊主室

なのに、なのに、

何この部屋

お酒臭すぎ

いかん なまじ五感が普通より鋭いばかりに・・・

これは キツイ

いや 普通よりは強いよ 酒に

でもその私でも 勦いだけで酔いそう

聴覚なら いつも通りリミッター代わりにゆるい耳栓をするんだよ

いや戦闘時は外すけどね

目は生前はカラー ロンタクトに度を入れて見えにくくしてたけど

今 すぐ見えすぎて 時々目が痛くなるし...

「気を抜いてていいよ

美月ちゃん

駄目だ この人からふんふん匂つてくる

この人実力はあるんだろうけど駄目大人だ

典型的な自堕落な

完全無視だ

「伊勢副隊長。」

今日は何をするばよひでしようか?」

「いあんなさいね。」

隊長

が全然仕事をしないから、ほかの隊に比べて仕事が多いのよ。」

「そんなのかまいませんよ。」

それにそれは伊勢副隊長のせいじゃないんですから

伊勢副隊長はす」いです

悪いのは全部

隊長

なんですか?」

「ありがとうございます 美冴ちゃん

それもさつよね 貴女に任せたのはこれだけあるのよ

渡されたのは

## 8?程の書類の束

青木副隊長が長休暇をとり、増えていた書類量の1・5倍以上

「わかりました

伊勢副隊長頑張りしちゃうね」

筆を握り腕を遣う

その仕事は的確かつ正確

きれいな文字

筆を使い始めていやシャーペンや鉛筆に慣れれた現代の人間がすらすらと

たとえ前世の“私”が筆に慣れ的生活をしていたとしても

2時間後 無事に終了した

「これでいいわ 休んでて」

そういわれても、ほかの人の墨汁を補充したり、書き損じの書類を書き直したり

気を利かせ定時までそこから離れることはなかつた

その日の定時後、美月は自室に戻りついた。

その帰り道で

わやつ

女の子の少し驚いたような声が聞こえた。

「……大丈夫？ つて

五番隊副隊長さんじゃない

「あれ？ こないだの・・・

「今は八番隊体験中の雛桜 美月ですよ。」

わやつわやつ

あつ 私名前教えてなかつたよね

私、雛森 桃つていつの

貴女 ここの間じゅわやんと言ひ合つしてたよね

仲悪いの？

「じゅうちゃん？」

「あ いけない

田畠谷隊長だった

よく幼馴染の「じゅう」の呼び方で読んじやうんだよね。」

「仲・・・いいんだ」

ズキンと痛んだ気がした

身の覚えのある痛み

かつて “私” がある時は太陰にある時はウインローに感じた感情

？嫉妬

そんなわけあるわけないと

思つた

“彼女”達の中では1番恋しているところ（せま回じ）美月ではあるが

数多くの前世の中で

“一田ぼれ”なんてしたことがなかつたから

そんな感情は、

ないものとして扱つた

まあ そういうわけで

八番隊はほかに言つことはないかな

i n 十番隊

「雛桜 美月です。」

「一日間よろしくお願ひします」

田上の人に対する敬語を使うことは美月にそれこそ魂の底まで染みついている。

「ああ よりしく頼む。

とつあえずこれだけしてくれ

渡されたのは5～6？程、六番隊より少しけれど、書類。

「これだけですか？」

（それだけでも多いわよ b よ乱菊）

「なんだ？」

もつと増やしてほしののか？ 離桜

眉間にしわが増える

「いえ、八番隊や六番隊に比べて少なかつたし、乱菊さん 松本副隊長はあんなに多いのに…」

「事務と一緒にあるな。あんな女好きで仕事に闘っては無能なあいつと・・・・・・

松本の場合

あいつがサボりまくるのが悪い。

それがあれでも、締め切りの近い奴は

俺が取り出してやつてる

松本の自業自得だ。」

見事ばつさつと言い捨てた。

「わつですか

乱菊さん これ終わつたら手伝いますよ

仕事送れるの困るし

」

私は手伝つといつたが、

私自身限つていうなら決められた仕事をしない人は最低だと思うし、自分の決められた役割や責務を果たそつとしない人は最低だと思つ

もつと最低なのは仲間を見殺しにすることだけビ・・・

上の立場に立つ者は、

自らの感情を捨て去る」とはなくとも

それに流されない心が

下に下る心が必要だから

上は下を守るものだと私は思つ

下は上を守りやせつれと逃げてほしことも思つ

たとえ最低と言われようがそれが私だから

人の上に立つところとは、決して簡単なことじゃないのだから

まあ

少々厳しいまた呆れが入った思いを持ちながら

自分の仕事を終わらせた

「田番谷隊長点検お願いします

乱菊さん 手伝います

と残つていた三分の一ほどを取つた

( もうこの辺で書類仕事に関しての乱菊さんの根気は見限つた美  
月であった。 はあ )

それに美月が取り掛からうとした途端

「五番隊副隊長雛森桃です。入ります」

「雛 雛 桃ちゃん。何か用?」

せらりと田畠の眉間にしわが増す。

「昨日は美月ちゃんが遊びに来てくれたからね

今日は乱菊さんや美月ちゃんとおしゃべりして仕事を終わらせて来ちゃった」

ただ今 定時4時間前である。

少し 私はその発言が気になつた

が、五番隊隊長の言い知れぬ不気味な雰囲気や、気配を思ひ出し彼のそばにいるよりはと想ひ直した

「たいちょー、お

いつも 怒つると眉間にしわが増えますよ――――

乱菊さん 余計なこと言わないで

私たちが原因なのに……

「まあまら しわがさうに増えた

「まあまるとお——————！」

「めえらのせいだうつが

「田畠谷隊長つ

それあんまりです

乱菊さんだけです。私もももちゃんも仕事一応終わってるんですよ。

ね 乱菊さん 後で遣りますよね。

私がやらせますし手伝いますので……」

最低限 決められたことはやる

それは義務であり責務。

仕事の中斷の理由の一端は自分なのに手伝わないなんてことしない。

まあそれは 自分より能力が下の人とずっと付き合つててきた “私” と私が学んできたこと

だつて人間 私と同じなんて思わないようにしなきゃいけない。

私をすべてわかってくれる人間なんかいない

少しだけでも線を引くそのことで、自分が傷つくことを防ぐんだ

“禁忌を犯した少女”

“世界を滅ぼしかけ、朋を殺しかけた少女”

“無力な少女”

“化け狐の子の孫”

“暗殺者”

“偽善者な偽聖女”

朋以外に味方なんて味方なんて

数えるくらいしかいなかつた

朋でさえ 最初敵の立場の時があつたのに

どうして完全に信じられる?

あああああ

もう ネガティブに走った

田の前では、少し涙田になりながら田番谷隊長に頼み込む雛森副隊長

田番谷「わかつ

田番谷隊長！ 松本副隊長！ 雛桜3席！

あつ 雛森副隊長もいらっしゃったんですね

「

やはり 桃ちゃんも副隊長

さつきまでの顔が変わり、副隊長の顔をしていった。

大虚メノスゲランデが数体と巨大虚数十体が発生！！

場所は北流魂街80地区 更木。

ただ今、下級席官が向かっていますが時間の問題でしょう

「わかつた。すぐに向かう。

松本、雛森行くぞ。

雛桜は、残つていろ。」

「つづいてですか！…

「お前は虚と戦つたことないだろ？が

お前は死神になつてからまだ数日しかたつていないんだ絶対に待つてろ！…」

私はその言葉を聞いて、思つた。

今の私には力がある

守る力も

闘う力も

癒す力も

力があるなら使いたい

でも、日番谷隊長は私を心配してくれている。

でも、

「絶対にそれは聞けません

虚の相手くらいい

生きてきた年数マイナス4年くらいはしているし。

闘うこと慣れます

今私は死神です。

力も

斬魄刀もあります 行かせて下さいっ

日番谷隊長は ため息をつき、

「分かつた。 でも死ぬなよ」

「当たり前ですっ」

私は、 一番長い刀 身の丈より短いが、 長い <刹那>を置いて  
行つた。

（現場）

「あつ 日番谷隊長」

「被害の状況は？」

「下級席官が応戦していますが、重傷者が1名、軽傷者多数です。

今 四番隊に要請すると一回りです。」

「（それくらいなら）

その必要はないわ

「なぜですか！？」

雛桜3席つ

「重傷者は1人なんでしょう

今私が治す」

そして 私は癒字を 1番短くてナイフより少し長いくらいの斬魄

刀を取り出す。

ちよつと短刀といえる長さかな

「ちよ 何してるんですか

私はその声を無視して（だつて論より証拠だし）

言靈を 唱える

「“癒せ、 癒す”」

その瞬間靈圧は上がり、柔らかい光を放つた。

柔らかな 翠交じりの白の光を放つた

「戻れ 癒す終わったわよ… 「危ない！」

「

大虚が私を爪で刺そうとしたのだが、間一髪でよけた。

「大丈夫か」

ちなみに怪我をしていた男を片腕で抱えている

「うん でもちよつと 頭にきた

「の田とあづかつといで」

癒すをしまい、腰に差している長い刀に（腰に差すと立つきやつ）  
手をかける。

朱い柄に鶴は羽のような形でこれも色は淡い赤。

それを包む鞘は、紅色。

長さは普通の斬魂刀と同じか少し長いくらいあります。

「何する気だ。」

「いりかかるんです。」

“炎よ散れ、朱夏”！――

朱夏は、炎をまとつ 朱い炎を

（火力は灼熱、魂をも燃やしきくす炎。お前は昇華されるしか助かる道はない。）

そうして私は大虚を一太刀で切り伏せた。（隊長たちは雑魚たちを相手していた 始解せずに）

「終わつたよ。 日番谷隊長」

「ああ（なんて奴だ。もう斬魂刀を使いこなしてやがる）」

その日は残業だった

乱菊さん書類ためすぎ

でも 私はどこに行くか決めたので  
十一番隊体験は断つた

そして 私は十番隊に入隊することを決めたのだった

番外編　十一番隊初訪問の巻（前書き）

十番隊に入った美月の初めて11番隊訪問の話です。

背負つものシリーズ以外は、時軸順です

番外編　十一番隊初訪問つの巻

「雛桜」

「はい？隊長何ですか」

「この書類届けて貰えるか？」

「はーい  
えつと

十一番隊かあ」

（番外編）十一番隊初訪問つの巻

「十一番隊つて戦闘部隊で有名だし、

戦いしか 意味を持たない人つて嫌いなんだよな  
(でも、副隊長は可愛いよなあ あと更木隊長には実力ばれたくないわ。

意味のない戦いなんて嫌いだし…)

等々と十一番隊隊舎前で考えていた。

はつきり言つて怪しい

「おいお前つちに何か用か?」

と私に声をかけたのは坊さんのようなツルピカ頭(失礼)の男の人

その隣には頭に翅をつけたおかげで頭の綺麗な男の人

「あ はい 十番隊から書類を届けに来ました。」

と臆することなしに言つた

それが気に入つたのか?

「ふうーん

まあ、入りなよ。（美しいし）」

中に入つて 絶句した。

「えつと なんですかこれ えつと・・・・・」

積み重ねられた書類の山に散らかつたごみ、散乱する酒瓶に垢にまみれた机。

十番隊と違ひすぎる（ちなみに綺麗さなら 一一四五  
六 七 九 十 十三八三 十一 十一 だと私は今思った）

「僕たちを知らないのかい？君

僕は十一番隊第五席の綾瀬川弓親でこつちが…

「更木隊三席の斑目一角だ。」

「すいません まだ他隊までは興味向かないの覚えてなくて（おいつ）

（だつて 他隊より今の自分の隊のこともひと細かく知りたいじゃない。）

まあなにを知つたかは秘密だけど……）

十番隊二席副官補佐の雛桜 美月です。』

「ああ 君があのドタキヤンした子かー。』

「はん あの更木隊長が言つてた。』

「そ・ん・な・」・とより

「いつたいこれは何！？』

半月からひと月分はあるぞ

「それは溜めてるやつだよ ▽▽』

私の後ろから飛びついてきたのは、ピンク頭の女の子一草鹿やぢる。

「草鹿副隊長…」

敵意とかそういう負の感情の類は感じなかつたから、気配に気づいても気にしなかつたけど…

「ひつつのところに入つた子だあー ねえねえ名前は？」

「雛桜 美月です。草鹿副隊長」

「やあねでいよーー  
美月ちゃん。」

ひつねひつねひつねひつね…

爆笑しそう…

必死に笑いは堪えただけど…

「じゃあ やあねちゃん

「仕事しないの？」

「えーー だつてゆみちーが私は手出しうるなつてじつし

たまにでいひつて 聞つてるよ」

「ちよ 『親さん

私手伝いますので、今暇ですよね～断定～  
やりましょう遣りましょ～～～～～～～～～～～～

「ひ、うん（迫力が…）」

逃げようとする一角を手に手をかけ、

「逃げないでください（黒笑　ただし無意識）」

「あ　ああ」

「おはよ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

丁寧な言葉が割り込んだ

顔を向けると、アッシュ・灰・色の髪に黒色の瞳、外人の血が混ざつてるように見える男性。

「あれ？」

珍しいですね  
十一番隊に他隊のしかも女性がいるなんて…

その声のする方向へと私は振り返ったのだった。

（視点移動）

一瞬時が止まつたかと思つた。

艶やかな朱色の髪に瞳。アカ

お団子にするとともに下に後ろに伸びした髪。

外見年齢は草鹿副隊長より少し上ぐらいなのだが

惹かれた

魅かれた

儚げに見えるのだが、ビームが強い意志の秘めた瞳。

ほつそりとした肢体。

守つてあげたいとそう思つた

(視点回帰)

「あ あのう

ビームしたんですか？

黙つちゃつて…

「あ ああ ご免

俺は、十一番隊4席をしている 須王修<sup>モト</sup>。君は?」

「初めまして、十番隊3席 離桜 美月です。」

それがいざれ零番隊第六席となる須王修<sup>モト</sup>ともファーストコンタクトであった。

「で、いつたい何したわけ?」

また副隊長がおいたしたわけ?」

「ぶつ そんなことしてないもん

修<sup>モト</sup>ちゃん」

「で、じゃああなたにも手伝ってもらいますーー!」

「お仕事今日中に終わらせておきますよ

半分はわたしやりますから

やうなこと 内をはじめ周囲にも迷惑ですしお

後のことを見ると、須王も含め少し顔を青くしたらしい・・・  
中にはあまりのスバルタぶりに悪夢につなされる者が何人も出たら  
しい

あの書類の山を鬼氣とした勢いで、終わらせたそこには、

十一番隊隊士達の屍が転がっていた

（違つ）

これくらいでへばるなんて、情けないなあ

（注 今まで初めて4時間ほどしかたつていません。

その間に 15～20日分のいつも200人で遣る書類を 今いる  
数十名で終わらせたのである。

まあ そのうち半分以上は 美月が終わらせました…

さすがに 美月にも疲労の色が見える 普通はその量5日はかか  
ります… b y ゴエ

「とりあえずみなさん1人1人渡したのは貴女土地の能力ギリギリ  
の量です。

みなさんでも、このくらいでいいんですね

今度たまつて、いたら私がまたやらせますからね（ヒツヒツ）

黒くないのに怖い顔だったと、のちに某三席は震った。

「おめで　すげえな」

と一角は倒れたまま立つ

「これくらいなら、大丈夫ですよ

6歳の「」の2学部分の大学時代の論文6年分に比べれば・・・

あれはさすがにウザかつた

“私・サリア・”の知識あの時はなかつたし...

一からだつたもんね。一番の記憶の経験が増えたのはよかつたけどね...

あつ　一角さん　明日練習試合してくんない？」

そう　話を逸らした

まあ　一角さんと試合してみたいと思ったのは本当

でも 今そういう理由は簡単  
知られたくないから

## 私の 罪 と 無

赦されることのないそれ

私という人間の根源

そんな簡単に話せるものでもない

まあ 詳しくは 言えないがサリアとは、前世の一つ  
医師であった“私”。

だって 私は こここの底から信じることなんてできない

心のどこかでは思っている

私のすべてを受け止めてくれる人などいないと

それを 耳にした人は多かつたらしく

その次の日にはほとんどの隊員が知っていたのであった。

当然、田畠谷隊長にも届き、

冷たい雰囲気に他隊員たちはびびっていた

まあ、本人はその理由にまだ自分でも気づいていないが…

斑目さんと私は竹刀をもつてそこにいた。

だって、斑目さんはともかく私の斬魄刀は抑制しないと被害が大きいもん。

まあ、山じい（山本総隊長）のよりは、マシだけどね。

もともと対人よりも対化け物に特化してるし

ただの訓練で神経つかうことしたくないし…

何にも考えずにのんびり戦える（えーーー）じ。

気が抜けるときは抜きたい派だし…・・・

「手加減はなしでお願いしますよ。

同じ3席だしね。」

「ああ 分かつたよ。

「行くぜ」

「いつでも」

バシバシバシ

激しく竹刀がぶつかり合つ。

それもかなり高速で

はつきり言つて視認できているのは、副隊長であるやぢると綾瀬川  
5席（須王は欠席している）

美月は、積極的に攻撃せず、受け身ばかりだ。

斑目さんは、大ぶりかつ大きな動きだが、美月は最小限の動きだけで攻撃を受け流す。

「はん

避けるばっかりせずにかかつてこいよ

「アガル、アガル」

私は反撃するために一瞬だけ今の自分が決めた力の上限を上回った。

普通の3席程度以上の速さで一角の竹刀を飛ばし、首寸前に竹刀を当てた。

実質的勝ちが決まつた。

# 地獄蝶が入ってきた

## 落ち着いた時

美月は手に止める

救急命令、救急命令

至急応援に向かうこと

場所は~~~~~

「聞けえたぜ

行くぜ—— 野郎ども

「美月ちゃん そばいへん~」

「こくよ。せひひそ

現場では・・・・・

「だいたい、4、50体かな。（だいたいB~C級じゃん。）

「美月ちゃん 美月ちゃん  
斬魂刀は——？」

「あ

やつぱ——

隊舎に置きっぱなしだわ

持つてゐるの、癒宇だけじゃん

癒宇は、短刀（20?あるかないかくらい）だから持ち歩きやすいけどさ

これやつていいかな?

いまだに3席がどれくらいできるか測りなねてるナビこれくらいできるのかな?

いいや、やつちやえ（めんどいし、

「まかせばいい」

「来い、『朱夏』。」

強い力を込めた言靈を放ち、パシッと手のひらを合わせゆっくりと

美月は開いていった

そこに現れ出たのは

## 刀

まぎれもない彼女の斬魄刀。

朱い柄<sup>つか</sup>に鐔は羽のような形でこれも色は淡い赤。

それを包む鞘は、紅色。

長<sup>なが</sup>さは普通の斬魄刀と同じか少し長<sup>なが</sup>いくらい  
ちよいづじ 日番谷隊長と同じくらいの斬魄刀と同じくらいの長  
さである<sup>いづ</sup>。

まあ この時点で人並み外れでいることに本人は全く気づいていな  
かつた

普通の死神は言靈は使えないのだから。

「せつ いきましょうか。

朱夏。

炎よ散れ、 “朱夏” 」

始解の解号を唱える。

朱夏は、炎を纏い、それで美月は虚をなき倒していく。

的確に頭を狙い、誰よりも早く、誰よりも早く、周りを把握しつつ無駄を出さず。

「全部で（他が倒したの入れて）46体か。

（十一番隊つていいつてもこんなものか。

ひでえ

結構

普通じゃん

「血の気が多いだけで。」

「『親さん、大丈夫でした？』

「当たり前だね。

負傷者に対しても4番隊にでもいえ

「けが人何人？」

聞いてどうするつもりか知らないけど、

1人は重傷、一人が軽傷、まあ少ないものだよ

「それくらいなら、呼ばなくていいよ。

私が何とかするから。

ପାତ୍ରାବଳୀ

すると一瞬でやぢるぢやんが連れて行つてくれた

「——おだやかじる」

「うがとう」が「うとう」

けが人のところに行くとまず、美月は

「大丈夫ですか？」

と意識確認した。

(軽傷者の意識はあるし、全然問題なしと、

重傷者は、意識はないが、呼吸は正常…ね。（）

空間系の術を使うまでもないの（あまり多用すると、その人の体内時間がおかしくなることがあるらしいので）

治癒靈力を使い、軽傷者をやつと治す。

その速さ正確さは、卯の花隊長に劣らぬものだった（卯の花隊長本人曰く）

（重傷者の傷は、

両腕、肋骨、あばら骨、右足など10箇所の骨折に、2度のやけどか。

一か所一か所治癒靈力でやるのは

ただの靈力の無駄ね。）

そして、懐からせいで20センチあるかないかの短刀 愈宇 を取り出す。

「愈せ、『愈宇』」

「親&やぢる視点

sideする

とってもやせしい光が、美月ちゃんのいるあたりから出たの。

花ちゃんとか呼ばないといけないかなと思つた大けがの人を

あつという間になおしちゃうんだもん

さつちゃん（＝大道寺皐月）やゆーちゃん（＝神無月由宇）、うみちゃん（＝如月海依）と同じで斬魂刀が一本じゃないつて噂で聞いてたけど本当だつたんだあ～

なんで 美月ちゃんは3席なんだりつ？

side ピ親

最初に会つた時の印象は、不思議な のほほんとしていて これで3席なのか だつた。

そのわりにおせつかいで面倒見がいいのか、11番隊のたまつた山脈並の（どんだけ多いんだよ by 作者）書類の山の3分の2以上を1日で終わらせてしまつた。

残りは、僕たちに指示してだけど

そのくせ、一角と勝負なんて身の程知らずだと思つたね

一瞬だけ・・彼女の笑いが嘘に感じたけど

それは置いといて

でも、試合は僕の予想を超えていた

一角の攻撃を最小限の動きで避け、一瞬で一角の首筋に竹刀を当た時は

強いそれに、なんてきれいに舞つようじに動くのだろう

と思つてしまつたね。

まあ、僕には及ばないけど（ナルシスト）

その上、あの虚を倒すときの素早い動き

また今の治癒靈力

正直なんでこんな人が3席についているのだろうと思つたね

傷跡一つも残さず消し、一息ついていたら

やぢるちゃんが、いきなり美月にいきなり飛び着いてきて

（もぢるちゃんとキャッチしたよ～ん）

「美月ちやんすつ」————つ

なんでも3席なんかにいるの？

それも、ひとつ一のところ

うちに来てよ～～

先ほどの十一番隊隊舎や書類を思ひ出し、

「いや、遠慮しちゃます。

戦闘も治癒も自信ありますけど（おこおこ）、必要以上に振りかざしたくないので

（面と向かって言つつもりないけど、  
）の人たちは尊敬してるんだし…私はつきりこつて更木隊長みたい  
な人種嫌いだし、  
まあ表には見せないけど

ああいう血に飢えた獣つてこうのかしら？

無理。受け付けない

まあ、東仙隊長みたいにはつたり態度に出すつもりはないけど

私平穀好きなんで。それに・・・

ふと浮かぶのは、隊長の顔

ぶつせんぱいだなび、部下思ひでやせじへい、

意外と素直なところもある隊長・・・

桃ちゃんといふときにズキッと痛む胸

はあ

認めやる得ないよね

私自身は初めてだけど、"私"は恋愛したことあるしなー

初対面だからとか通じないしもつ、

どうやら最初から私一眼ぼれしてたのねうそ、自覚と同時に失恋  
かあ、

私なんかにはもつたいない人だし、桃ちゃんをお似合いだし、でも...

たとえ叶わなくとも

「私は日番谷隊長のそばにいたいんです。」

その顔はまさに恋する乙女のもののよくな感じで、

頬には少し紅さし、瞳は真剣。

恋した乙女はなお美しいといつが彼女の内面の美しさがにじみ出た  
ような、少し儂いがとてもとてもきれいな微笑みだった。

それはどこかはかなさと切なさが含まれていたけど…

聞きたくないことわざぱりと聞くのがお子様

「美用ちゃんって、ひつんの」と好きなの~~~~?」

（あまりに率直な疑問に思わず無言）

「私 美月ちゃんの」と応援してるからね！――――――――――

のちに一人のやり取りを垣間見た一角さんはいう

(いや、あれど「見ても何思いだらうが、

鈍すぎだろ(ひ)

## おまけ

「一角をとつて、占解できるでしょ。

実は私もなんです」

そばにいた四歳の親さんはあきれたよつて美月を見る。

「いじんなといいでそんなこと言つたら、そう隊長に知られる可能性が高くなるよ、あの四十六室に知れたら、無理にでも隊長になつちやうよ」

「はーーー（四十六室は面倒な存在なんだ。ふーん）」

番外編 現世の記憶（前書き）

美月の一方的卯月との再会です

これも時軸本編月の導きの4話と5話の間に

「あの田畠谷隊長、松本副隊長」

「「なんだ（句）？」

「2人には現世での記憶ありますか？」

現世の記憶

「ないわねー」

「ねえよ

そもそも現世の記憶なんて完全に持つてるやつの方が少ない  
てこりか少なくともお前ほどやつ見たことねえよ

仮にあったとしても、

「何すこと何十年も前の」と記憶こねえよ。」

現世での記憶を完全に持つものは少ない。

非常に濃密な記憶を持つあるいは何かの強い力を持つ者

あるいはその記憶を持ちたかったか

まあ全くない者も少ないので

時と共に新たな記憶に埋もれていく

まして普通の人間の何倍もの寿命なのだ。

だから戸魂界に来たばかりの者は記憶を多く持つ。

まあ生きていっても全て記憶を忘れないわけでもないしおかしくはない

隊長格は少なくとも過去2、30年変わっていない。

生きていたなら子供が親になるほど長い刻

（例をいうなら乱菊さんにいたっては100年前にはすでにこの戸魂界にいた）

死神は輪廻の輪に入らず

死ぬことにより生まれ変わる。

流魂街 の人は一定の時が過ぎると生まれ変わるのが…

それはまた別の話

まあそんな訳で覚えていられる方が不思議だ。

「で美月そんなこと聞くつてことは何か話したいんだろ。

現世のこと」

彼は彼女の美月の少し聞いてほしい気持ちを察したのだ。

そして彼女は話す。

大切な思い出を

「

私は空座町に住んでたの。

2人は知ってるかもだけど私の家は精霊術師の血受け継ぐ直系。

1000年以上前からね

精霊の力を借りて妖魔や虚を倒したり、半場虚化しかけた怨霊や整の浄化・まあ戸魂界に送つてた。

でも、やっぱり腐つていいく。

少なくとも私の家、離桜家はね

強大な力を持つが故にね。術師以外を見下し、傲慢になつていいく。

どんなに頭がよくても

どんなに運動能力が高くても

どんなに精霊術以外の結界術や特殊術が出来ても

精霊術が使えなければ全て無駄。

しかも私の家が司る精霊術は炎 つまり炎術師の家系

この力は最も強い破壊力を持つだからこそ他系統の精霊術師まで見下してた。

元々それが私達の力って訳じやないのに

しかも金や名譽に取り付かれて

庶民の依頼を断るのなんて日常茶飯事だった。

とくに古い考えの持ち主はね。

私のお父様は、頑なに名譽を守ろうとする古参に従つてたの

当主なのにね

多分それは得体のしれない母を後妻とした弱みに付け込まれてどうけど

私は、古い考えのやつも

いいなりの父も

全て、ぶち壊したかつたんだ。

父は、いづなり古参ことつて傀儡にしやすい楽な当主、

そんな父が唯一言いなりにならなかつたのが、母を妻にする事らし  
いけどそれは置いといて

だつてその概念のせいでの子は傷つけられたから

だから家から連れられる任務以外に

自主的にやつてたの

そのうちの一つが、靈圧垂れ流しの友人に虚が近付かないようの処理

（なぜかやつてなくとも妙に避けてたけど…………）

それをあの子と

卯月としてたの。」

「卯月？

それは誰だ?」

「雛桜 卯月。

私の双子の妹です。

今もなお生きている・・・」

「美月の一族は死神も見えるんでしょ?」

「どうしてあなた、会いに行こうとしないの?」

「それどころか、現世任務に極力行こうとしないでしょ。」

「だつて・・・会えるつていつも死神・・・死人としてだし、

私が死んだ日ね、隊長は知つてゐると思つけど私 一人だつたでしょ  
う?」

あの日は、卯月の都合で、私一人で虚をおびき寄せて、へました  
んだけど

いつも背中合わせで戦つてゐるから後ろの注意怠つちやたのよね。

2人での日戦つていたら絶対私は死なかつた。少なくともあの時はね。

だから 今の私をあの子が見たらきっとショックを受けると思うの

よね。」

もしかしたら、それで記憶を取り戻しちゃったのかもしれない  
それに 後を追つたかもしない。

私は 惡い んだ

あの子のためとか言いながら、

過去の“私”の罪を思い出されるのが

しんだ彼女を見るのが、

そして逆にしんだ私と生きてる彼女の違いを実感するのが…

だつて私は置いてきてしまったから

また

強いやつで精神的に弱い彼女を

まあ 私も精神的に強いとは言えないけどね

だつて私も“私”も置いていかれることへの絶望と辛さをよく  
知つてるから

「友人のため…か。

他人のために死ぬのもお前らしいよな

でも、その友人のためにそれをやつてたこと後悔していないんだ  
うう。

やさしいな おまえは「

違う ちがう チガウ

私は優しくなんかない

汚くて、醜くて 人間らしい人間だ。

嫌われるのが怖くて

過去を知られるの怖くて

他人を完全に信じることが怖くて

失うことが怖くて

一護のことだけって私はただ、身近な人に死んでほしくなかつただけ

卯月が少しでも悲しむのを防ぎたかつただけ

一護のためじゃない

だつて、結局私は卯月のいえ、自分のためだつただけ

そんなの私のH'P

はつきりいって私は一護とは私あまり仲好くなかったし（幼馴染ではあるが、苦手だった。）

最後の3年くらい惰性だつたし

だつて、絶対私は、卯月と一護なら、たとえ一護が死ぬことになつても

卯月を真っ先に選ぶと思うから・・・

（「めんなさい 私の中の美冴さんは」）んなかんじで 朋と卯月至上主義です。

朋&卯月 愛する人や自分が認めた仲間 越えられない壁 自

でも、彼女はこう思っていますが、他人が傷つくより自分が傷つくほうがいいと考えがちなので、やはり

やさしいですよね by ユエ

「…………優しくなんかないですよ

私。 だって 妹が卯月が悲しむほうが私はずつといやだから。

妹と友人なら絶対妹選んじゃいますし。」

「誰だつて優先順位があるのは、心がある人間なら当然だろうが

人の心を考えられるその時点で冷たくなんかないだろう

それが誰かのためにせざ自分のためにと言える時点で十分おまえ  
は優しんだよ」

涙がでた

急いでそれを隠したけど

優しきのは隊長のまつだよ

私なんかまで優しく覆つてくれる

隊長こまね桃ちゃんがいるの

勘違こしありやつ

「お前はもつとわがままに自分の気持ちに正直になつたまつがいい

松本」

「はーい。

斎藤4席い 少しの間私たち抜けるわ

「仕事は終わらせた（まは、美月と畠畠谷で）から」

やつひの隊の4席・斎藤 一 に聞こ、

「よつまどの指令じやなに限り呼ぶなよ（冷たて靈圧）」

「一体全體何なんでしょう？」

「行くぞ。 松本、 雛桜。」

・・

「任務だ。」

仕事熱心な美月はなんの疑いもなしにひいていへ

「はい」

松「はーいvv（確信犯）」

そして現世に向かつた

ちやんと十番隊担当区间だと信じて

もちろん限定期は押したよ、私はなしだけど

でも、降りたつたそこにあるのは見覚えのある風景。

数か月では変わり映えのないそこは

「た、隊長」

「いいや座町じゃないですか〜〜

「JUJU三番隊担当区域でしょ

だましたんですね

わたし帰ります

穿界門へと引き返そうとした私をガシッとわしづかみするのは、乱菊さんだった。

「やつぱし、松本副隊長もグルですかあ~~~~~!~」

離せーーというよつにもがいでいるが全く力を入れていないし、本気で嫌がつてもいない

「おとなしく 妹の特徴を教えなさい」

「ハハハ

はい

（本当はだれかに無理矢理でも連れだしてほしかったんだ。

会いたい気持ちもホントウだから）

でもその前に行きたいことがあるんですが・・・

セイジマ・・・

私の 最期の場所

そして初めて田畠谷隊長と出会った場所。

「いいで 死んだんだよね 私

もう血の跡も、匂いも何もそこには残っていない。

戦った時の靈圧の痕跡さえ

そこに貼つてあったのは通り魔事件の張り紙

「私が虚に殺されたの、通り魔の仕業にしたんだ。

まあそれしかないよね

哀愁に浸っていると懐かしい懐かしすぎる靈圧が一つと薄い薄い靈気が近くまで来たことが分かつた。

「 ちょつ 隠れて、靈圧消して」

慌てて私は隊長と乱菊さんの手を引き隠れた。

そこを通りかかったのは、すごい量の靈力を垂れ流しにするオレンジの髪の少年と

薄い薄い普通の人間レベルの靈気を漂わせる藍色の髪をボーネルにした少女

だった。

「なんだ? この靈圧・・

垂れ流しすぎだろ」

そりなんだよね

はっきり言つてあの靈力づきがつた

本氣で「やかつた（黒）

それだけ蛇口が弱いんだよって思った

（すんません、一護の扱いひどくて、

だつてあんまり好きじやないんだもん

byコヒ

ていうか 年追いつごとに増えてるし量

ていうか、感覚鈍ったかな？

卯月の靈力感じたん・・あ

見間違うのも無理はない

嘘のように霸氣がなく

生気が薄い 少女

（そういうやつ “私” が力ある世界で、“私” の方が早死にするの  
初めてだつけ？

「今まで取り巻く雰囲気が変化するなんて・・・」

浮かべている微笑みはまぎれもなく、偽り嘘のもの

まあ、あまり彼女を知らない人間ならだませるつまい仮面

わかってる

やつさ私が感覚が鈍ったかと思ったのは

信じたくなかったから

私の死がこんなにも彼女を変えてしまっているだなんて

その反面わかるにはわかるんだ。

だつて逆でも同じとしたと思つし

改めて思つんだ

「めんなさい 置いていってしまって

でもよかつた まだ記憶思い出してないね

あんな記憶なるべく遅く取り戻したいし

松「あの女の子。」

田丸とか靈圧の感じとか美月にしていますね もしかしてあの子?」

「… はい」

「美月が、双子の姉が死んでまだ2、3カ月だつて言つのに、全然悲しんでいないじゃない（美月さんの仮面はつまいです）」

憤るよつて言ひ乱菊さん。

私は、卯月が薄情だとは言われたくないくて乱菊さんの言葉を訂正しよつとした

そのとき

「松本、悲しみを隠すのがつまこやつだつてこるんだ

見た目で判断するな」

大切な妹をかばってくれた

たとえその気がなくても

うれしかつた

たとえそれが、彼の昔の記憶と照らし合はれて言われた言葉だとしても

一護と別れると、とたんに仮面が崩れた

「美月……

美月い

「めんなさい」「めんなさい

私のせいだ

ねえ 本当にあなたの魂はもつぢにこもないので?

虚に 食われてしまったの?

答えてよ

答えてよ 美月い」

まさにそれは 悲しみの慟哭だった。

卯月の瞳からあふれ出る涙

必死に、私は 自分を抑えた

そうじやないと飛び出して行きやつだつたから

魂の双子の間には

生と死の 絶対的な壁があった。

だつて 一緒に過ごすことはもつできないのだから

一通りなき終わると

「黙目だな

私

いつまでもイジイジしてそれこそ美用にせりやれるよな。

死したものにこだわるな

とか

そんなに悲しいなら忘れて・・・とか

でもね美月。あなたは私の半身なの

たとえ 道が分かれてしまつても

強がりだといふことは

分かつた

わかつてしまつた

でも その言葉に励まされた気がした。

「いいのか?会わなくて

「うん」

美月の瞳からも涙が次から次へと流れていった。

「美月がここにいないことは知ってる

でも、私はここと、あなたの眠る場所だけでは

弱い私でいさせてね

美月はなんでも抱え込むから、気をつけてよね

卯月に拾われないような小さな声で言つ

「それは、卯月もでしょ」

似すぎる二人の性格であった

「いっけない

今日仕事はないけど任務があつたんだっけ

急げ——あと5分

相変わらず無理した表情ではあるが、

さつきよりはるかにさつきりした顔で

走つて行つた

すゞしく素早く

死神の瞬歩に劣らない

ちなみにふつうに帰ると、15分ほど

それに美月はついていく

「最初はいやだって言つたたくせにねえ」

「それはそれです

見ると

少しは成長してるか見たくなつて

（私という後ろ盾なしの家の反応も）

そしてついて行つてたどり着いたのは

雛桜家の目の前

そこで私は待つていたが

## 揺れる卯月の靈圧で

何も ここの家は変わっていないのだとほっせりと直覚した。

しばりくするとまた卯月が出てきた。

持っていたカバンなどは手になく、代わりに肩下げのショルダーバックを付けている。

まあもちろん両手がふさがれないようにこの処置なのだが、

美月は懸命に自分の気配を消す。

靈圧を無にして、存在感をゼロにする。

(ハンターで壊つ絶、である。)

そして卯月の後を追う。

「いや、今日は比較的近場のよつで、車ではない。」

まあ、車を使うのは車で1時間の距離以上からぐらぐらであるが・・・

(遠つ)

夕闇がかつてるので、彼女は急ぐ。

あらゆる建物の上を飛び越し、走り、疾走し

ついたのはとある古い神社の前

「うわあ

ひとけがないなここ

でも、TVでにぎわうよつな神仙疑うといふよつ小さな祠とかのほうがよっぽど力持つ場合もあるしね

まあ、神様はいい意味でも悪い意味でも神様でしかないしね。

やつてとにかくつたよ。

依頼状読んでなかつたし、今読もううん

物陰からは

小声で

「おい、お前の妹抜けてないか？」

「ふつう状況とかは把握してから来るだろ」

「あはははは、私がいた時は2人での任務だつたから私が一回田を通じてそれを卯月に簡単に伝えるつて感じだつたしねえ。

「でもさうに、ボケボケになつた気が……」

読み終えた卯月は

「なんだ、ただの淨靈ジヨウレイか。

除靈でもいいらしいけど、こつちは簡単だけど問答無用の魂の消滅だしね

「

言葉を唐突に止めた卯月。

彼女の様子は気になるが少し話しておこう

除靈は、靈を取り除く」とあるが、これは靈に関する配慮な  
しなので、その靈は魂を消滅するか大きな損傷を魂に受ける。

これをするのは、未熟な術者か、あまりに凝り固まつた惡意の念が  
強い半場怨靈化したどうしようもない時である。

なお、靈子は残るのでそれは器子に変換するか、ソールンサイティー尸魂界に送る。

まあ術者の種類によつて（まあ言及はしないが）これしかできな  
いときも多々あるが。

対する淨靈は、魂の穢れを淨化し、虛の場合は罪を洗い流しソールンサイ尸魂界に送る。

では卯月に視点を戻そう。

「氣のせいだと思いたい。」

淨靈のため、精靈の声に耳をすませる。

もし精靈の見える者がいたのならこの膨大な数を統べる彼女に驚  
くであろう。

数百数千数万、この世界の精靈は、五種類に分かれ  
る。

炎 水 地 風 雷

そして、それを操るものと精霊術師といつ

たとえば、マグマなら、炎<sup>2</sup>に対し、地<sup>8</sup>のようになるし、水蒸気なら水<sup>9</sup>、空<sup>10</sup>のよつた割合でその精霊が存在し、

この混合物はより強者が操れる。

例をあげるならば、マグマを同力量の地術師と炎術師が争えば、地術師に分があり

炎術師がそれを上回るなら、はるかに力量は上だといつことである。

ほかの話はとりあえず置いておいて

卯月が操る精霊は、水。

「げつ 虚が20ほど出でちゃつ。」

「 パーパーパー 」

指令機が鳴り響く。

そして、その通りの虚が出現した。

「隊長、乱菊さん。

大丈夫ですよ。

私たちが相手しなくても

そう美月は言つ。

「なんだ、雑魚か。」

卯月は出現した虚を見ながらそつと言つてその手に一瞬して氷の矢を作り出す。

もちろんこれは精靈術である。

水術師の彼女にとつて水や氷、雪、水蒸気

どれも操るのが容易なものである。

同じく氷の弓で、的確に矢を放ち命中させる。

もあらひのうのは虚の頭。

自分に何一つ傷をつけず、土埃一つ体を汚さず、周りの神社などの建物や木々にまったく被害はない。

その間わずか、1、2分。

「いつまで倒れたふりしてんの？」

気配でんたが2体が合体した姿だつたつてわかつてんのよ

下だつたあんたは倒されて（死んで）  
ないでしょ

つまそつなその魂を喰わせろ———つ

グサつ

氷の矢はその頭と腹を貫く。

「悪いけど虚には手加減しないから

瞳に冷たい怜俐な光を宿して彼女は言った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「美月の妹もなかなかやるじゃない」

「うん。

だけど、うちは、炎術師の一家だから  
忌むべき突然変異だつて言われてるのよね」

権力に固執し

力に固執し

傲慢に人を見下す最悪な人たち

血が繋がってるだけの他人と私はみなしている

そしてその考えに何も疑問を抱かず卯月を迫害してきた分家の  
子供たち。

してこなかつたのは明良だけかな。

私たちの一族は炎の熱さを知らない

ふつうの炎は効かないし、効くのは自分より上の炎術師の炎だけ。

だから、無邪気にひどいことを私がいないときにしていた

唯一の例外である卯月

水の力はわずか1年以上前に発現し覚醒した。

だからそれまで、無能者と言われ

炎で腕を焼き、

背中を焼き、

集団でリンチした。

あれは、いじめなんて軽いものじゃない

迫害よりも強い

殺人未遂だ

恐ろしかつた

少しだけ

自分たちの無知の罪も知らないあの子たちが

血がつながつてているだけで恐ろしく感じた

“私”のことを思い出す前、だつたからなむせり

思い出してから思うのは、あれだと

ただそれだけだ

もう私にとつてどうでもいいものだから

嫌いな相手に割く時間はもつたいないと私は思う

卯月は行きと違いゆづくじと帰つていた。

まあ少しでも家に帰るのを遅らせたいのだろう

その帰り道。

「おいつ

馬芝中の雛桜 卯月だな」

ガラの悪い連中が、卯月を引きとめた

「さうだけど、何か用？大勢お揃いで」

そうすると口々に、男女入れ混ぜつてこる

「あんたのせいだ、つちの彼氏全治5カ月だつてよ」

「俺の連れにさういふんないとしてくれたな」

「私のところなんて後遺症が残るかもつて」

etc

「はいはい。

つるさー

て、「うかどれのことかわからんないんだけど

私は理由なしに手出ししたりしないよ

向こうから手え出したか、しつこかつたからじゃないの？（美月  
が死んで喧嘩ばかりの時も理由なしにはしてないし）」

冷静かつ反省のかけらもなく、恐怖もない卯月に腹をすえかねてい  
るのか、

一気に卯月に襲いかかる。

「ここからは一方的かつ一瞬だった。

一人ひとりの急所を的確につき

意識不明の重体もしくは、気絶状態にさせて行った。（微妙に  
男のほうが対処だひどいが、そこまで変わらない）

確實に過剰防衛

最後の一人のとき  
気を失う前に

「さすが、？瞬殺の戦姫 ね。

ところでもう一人の？微笑の戦姫 はどうしたの？  
最近うわさも「つるるさこ」グハツ」

卯月の雰囲気が変わった。

「あんた達なんかがその名を口にしてみる

堕とすよ、下に」

鋭い殺気が一瞬放たれたのであった。

「おい、？瞬殺の戦姫 とか？微笑の戦姫  
とかなんだ？」

もちろん隠れたままで、口番谷隊長が聞く

乱菊サンは今の卯月の動きに感心している。

「ああ、生きてた時の私と卯月の通り名みたいなもんかな。

しつこい男とか今みたいに容赦せずにしばいてたし

たしか、卯月のほうは、一瞬で笑いながら相手をKOするからで、

私のほうは笑いながらそれを見めて弱いと狙えば返り討ちにあうから

らじこわ 戦姫ってほどじゃないこと思つただけど

「（怒りせなこよひじよひ）」「

そして私たちは帰つて行つた

side卯月

今日放課後から妙な視線を感じた

気配もしないし氣のせいかな

あんなことこつたけど

本当はまだまだ立ち直れない

苦しい さみしい

やうしてもういいない 半身を求めて泣くのだった



番外編 繰り返された悪夢（前書き）

美月のルキアとの出会いです

「やあ、美月ひやんじゃないか？」

今度うちの隊に遊びに来なよ

それがきっかけだった。

繰り返された悪夢

「ふ、ふ、ふーん」

機嫌良く走って行っているのは私こと雛桜 美月である。

浮竹隊長は、好感の持てる良い隊長だと私は思つ。

まあ私を子ども扱いするところは少々気になるのだが、

部下思いで、他隊との連携もなんのその古株の隊長

いいよねえ

権力がさに着ていろいろしてきた家の御歴々に比べたら  
月とすっぽんだわ

考え事をしながら、走っていた

結構な速さで

だから、

「げつ 止まれない」

ドチーン

角から来る気配に減速を始めたが遅かった。

見事に激突

あー こんなの見られたら笑われそう

「つ（痛みになれても痛いもんは痛い）

大丈夫？ ごめんなさい

「…………、済まぬ。そつちは平氣か？」

「ぶつかったのは、ふさつぱいの黒髪が綺麗な女の子だった。

紫がかつた瞳を瞬ぐ。

「うふ、へーきよ。

あなた、そつちから来たつことは十三番隊隊員さん?」

「あ、ああそうだ。

朽木 ルキアといつ

「浮竹隊長つてど」か知らない?

知つてゐなう案内・・

「やあ――――」

「――――」

突然、叫び声が聞こえた

始まる始まる

悪夢の再来が

その声はまだ続く

「虎徹三席 やめてください」…」

その声のもとに向かうと、一人の女性がその制止の声をかけた隊員に刀を振りかざした。

そして、振り下ろす。

誰もが、助けは間に合わない

斬られる。

そう考えたしかし、

それに反して肉を割く音はしなかつた。

見ると、朱の髪の少女が、それを、背の自分の刀を抜き、攻撃を防いでいた。

(すいません 他者視点を混ぜました)

s.i.d.e ルキア

何かに操られたように、斬魄刀を隊員に振り下ろした虎徹二席。

でも、それを守ったのは先ほどの少女。

私は動けなかつた

「虚に憑依されてるわね、こいつや

前に見た物の怪憑きみたいだし」

そう少女が言った時思い出したのはあの時のこと

いつまでも降り続ける雨

死んだ人の抱きしめる私。

魂と魂の融合

またなのかと、田の前が真っ暗になった。

「虎徹三席つてことは、十三番隊の異例の2人の三席の一人で、四番隊の虎徹副隊長の妹の、虎徹清音さん、よね

様子からして、憑依されて1～2時間つてとー？」

肉体があるときでさえ、ああまで完全憑依されたら、短期間しか持たないつて言つたのに

（もつともこれは“私”の経験談だけど）

魂での憑依　いやこの場合融合？か

早くしないと自我が崩壊しちゃう・・・・・

人間の自我はもろい

とくに悪しき意識により少しづつ少しづつ蝕まれる。

憑依状態が長く続くと、肉体の場合一つの体に2個の魂つていう不安定な状態なので体力が奪われる。

まあ、肉体があれば完全憑依は瞬時にできない分楽なんだけど。

ああああ

こんな時精霊術が使えたなら、簡単なのに。

死んでるから使えない

虚の部分だけを焼き払つ」とが

また 欲しい

浄化の力が

『美月、美月。

精神力を研ぎ澄ませろ』

朱夏の声が頭に響いた

「（ビリビリッと？）」

『我が契約者であり、超越者であるお主なら可能じや。

我は『』お主の斬魄刀として存在しておる。

現世より負担は大きいがな』

- 超越者 -  
契約者 -

懐かしい 言靈

超越者とはあらゆる次元において神に認められ力を借り受けることを認められたをさす。

その数は今この世界に片手しか存在していない

美月の生家、雛桜家ははるか1000年ほど昔、神獸・朱雀と契約した超越者の血を継ぐ家系である。

いやそれだけではない、ほかの4家、

水の神名家は、神獸・玄武との

地の大道寺家は、神獸・白虎との

雷の神無月家は、神獸・青龍との

風の如月家は、神獸・黄龍との

超越者の血を引く。

はるかなる昔

契約を結んだ超越者の名は薄汚れ伝わっていない。

だがしかし、数人だけが知っている

それを知るのはごくごく僅か

朱雀と永久の契約を結びし超越者

天照の血を色濃く受け継ぎ、帝の係累の娘

そのものの名を、あべの 安部いや雛桜 美月と言つた。

その名前も生まれも

今は本人たちだけが知ること

歴史の中に埋もれた存在

今、その5人の超越者が再び生まれたことも・・・

「（わかつた、朱夏の言葉と自分の力信じるよ）  
ふう

精神の水面は波紋の広がりを止める

溢れでるのは言の靈

強き言靈は力と一つになる。

「我が守護精靈朱夏よ。

この者と、この者の中にある悪しき虚… 一つの魂を引き離し、  
悪しき者を滅せよ

“炎よ散れ、朱夏”

いつも、始解したときに出て、朱い炎ではなく、その色は

黄金。  
きん

（一回元解を試したことあるけど元解は基本朱金色だったよ。）

淡い淡い青がかつたそれは清音を覆つた

「ば、バカ者ー！」

何をしておるのだー！」

「どうしたんだ？」

あわてたルキアちゃんの声と、

今来たばかりの浮竹隊長

大丈夫ですよ、とは無責任にすぐ言えなかつた

たとえ信じていても

清音さんが倒れたと同時にその炎は消えた。

「虎徹三席つ

殺す必要があつたんですか！？

簡単に仲間を殺して平氣なんですか？！」

痛い言葉

それを紡いだのは、私が斬られるのを防いだ隊員。

私は清音さんの胸の上下してゐるのを遠目に確認し

「殺しませんよ

彼女に憑依した虚だけを焼き払つたの。

彼女の魂には何の影響もないはずよ

急いで脈を確認する隊員。

ルキアちゃんが

「そんなことが・・できるのか?」

「うん」

浮竹隊長は私に向った

「私の部下をありがとう」

その言葉で十分だと思った

「あの、あなたは誰なんですか?」

「ああ、そういうや入ってまだ間もないし、

新入隊員他隊まで把握していないか

私は、

十番隊三席副官補佐の雛桜 美月。」

なぜか知っている浮竹隊長以外に驚かれた。

いち早く正氣を取り戻したルキアちゃんが

「あのですか」

「あのつてどんなうわさが流れてんのーー！」

いわく

その1、仕事が早く正確

その2、斬魄刀と3本所持

その3、普段の靈圧は3割ほど。

その4、綺麗だが幼い

その5、斑目三席に完勝したらしい

1～3、5は許せるとして、幼いってなにーー。

一 応圧Nといでる

うーーーと身長のびるの遅かつたから小さいけど

3も3割も出してないし

使って一翻強だよ。

ああでも 今は靈圧いつもの半分増しからいを使ったかも

「ルキアちゃん。

敬語やめてね

私たち友達でしょ。

浮竹さん、お茶するん

「 いい度胸だな、雛桜。 」

たいちよう

私の分終わらせましたよ。」「

「お前、松本の逃亡補助しただろ？が、

松本の分手伝つてもいいはず」

「ルキアちゃん またね（泣）」

「ひ、隊長の『眞集に田がくひん』だたし（おこ）

もう一度と乱菊ちゃんのお願いなんか聞くか——

「強制終了」

番外編 繰り返された悪夢（後書き）

始祖については、私のサイト内の少年陰陽師連載でわかるよう前世の彼らです。

そちらは亀並ですがぜひ読んでくださいな  
ちゃんちゃん

ちなみに他オリジナルキャラの評判は

如月海依（一一番隊副隊長）

・・・美麗な男装の麗人。斬魄刀2本持ち、碎蜂隊長に認められる実力。

神無月 由宇（三一番隊三席）

・・・市丸をたしめられる女傑、斬魄刀2本所持

大道寺 鼎月（四一番隊三席）

・・・第一の卯の花、腹黒、毒舌お嬢、斬魄刀2本所持

青木 輝（六番隊副隊長）

・・・なんでこの人が副隊長?、特に目立たないので実力を不審がられている

神代 魁(十一番隊三席)

・・・「こいつのやつは、ほんとマジでサイヒントスト?」

須王 修宇(十一番隊四席)

・・・十一番隊だしやつぱり粗暴なのか?、

美冴さんはうわさで判断するのが知らないのでそういうの全然知りません

如月海依メイン

背負つ者シリーズ

その1、2が原作約3年前  
その3が約2年半前

詳しい時軸順

一の1 四の1 三の1 一の2 四の2 三の2 その3はま  
ぼ同時期

です。

12話続きます

「—」とこ「う字を背負つ者

海依独白

心に深くつけられたキズ

「男なんて、大嫌い。でも弱い私（＝オンナ）も嫌い。」

弱い心を殻で覆つた俺

今は、それがないと落ちつかない。

いつだつただろう。

私を俺に変えたのは。

「まったく、あの子邪魔だつたらありやしない」

この顔のキズは、愚かな私の象徴

義母を信じた私への

「海依は海依でしょ。」

あの二人が弟の風がいなければ

「姉様っ」

私は壊れてた

誰か助けて・・

私の口口口を

弱くて不安定で私は俺は自らの生を拒絶した

風がどれだけ悲しむか考えもせず

死んで悔いなく成仏し尸魂界に来た途端の過去の記憶の奔流。

俺は自分を恥じた

だから死神になつた。

そう思つた時代（頃）もあつたんだ。

過去の記憶を取り戻す前は

前世でも裏切られることばかりだったのに懲りずに入を信じる俺。

でも信じてダメだったって思つてもやつぱり信じたいんだ。

疑つことよつ信じることの方が難しくて

諦めることより諦めないことの方が難しくて

でも俺は信じたいんだ

世界は醜いものだけではないことを

俺は中途半端だ

時々自分が男か女かわからなくなる

でもそれも含めて俺だから。



「！」といつぱりを背負つもの

- 1 -

### 碎蜂視点

ここ数年田ぼしいものは誰も見つかぬ。

そう思いつつ、靈術院に向かつのは、各隊につきの入隊前1月の間に、隊長格は少なくとも一度訪問する義務がある。

まったくもつて面倒であるが

これも後継育成のため、山本総隊長が決めたことである。

少し憂鬱に思いながら歩を進めた。

が、突然強い靈圧を感じた。

少なくとも今年卒業する者にはいないはずの値の靈圧

「なんだ？」

「この靈圧は……？」

今日は私以外死神が訪問しているわけではないし

軽く上位席官レベルはあるぞ。」

これは、今年卒業する奴以外が出しているのか？

おもしろい

うちの隊にほしいな

そつ懸こうつわぢに足を向けたのであった。

それが始まりだつた

時は少しさかのぼる  
暦を言つと、

春、3月

s i d e 海依

俺が今おかれている状況を説明すると

上級生に囲まれている

それはすべて 男である。

ああ

俺のこと知らないかもな

俺の名前は、如月 海依。

こんな外見、言葉づかい、服装（男用学院制服）だが、

女 だ。

こんな外見と言つと

作者いわく

『少し透明な水色がかつたきめ細やかな銀色の髪を乱雑に一つにくり、

蒼穹の』とく澄み渡つた水色の瞳はすべてを見通す綺麗な鏡のようだ。

中性的な容貌は、どちらかといえば男性的で、

だがその鼻には深い傷跡がある。

その声は変幻自在で、普段の声はとても大人っぽくハスキーだ。

雰囲気も女という感じはしなくて、かといって男のような粗暴さとは程遠い。

いうなら、男装の麗人の雰囲気である。

らしい。

俺は普通の銀髪水色の瞳だと思つたが、

(いや逆に思つてたらナルシストだと思つが)

まあ、こんな感じだ。

そんな俺は、この真央靈術院（以前は死神統学院だつたらしいが）の一回生特進クラスである。

―― 作者視点 ――

絡まれている理由は簡単。

成績優秀容姿端麗なのにさぼりまくり、しかも入学初日に先生を倒したという海依はいい意味でも悪い意味でも目立つ。

同学年内ではあこがれの目で見られるが、

上級生には煙たい存在なのだ。

なおかつ、彼女（違和感ありまくりなので、海依呼びします）は、一部（数名）を除き男だと思われていて海依もそれを訂正しない。海依いわく女だと認められるよつましだし、どう思われよつと自分で自分らしい。

つまり、すぐ女子にもてる。

つまり  
僻みだ。

ていうか女ってわかつてももてそつ。

先生を倒したということからわかるようにその実力は、学生のものではない。

海依は死んですが、6月中旬中途入学。

もうすでに始解、正解を齎得済みだ。

まあ先生たちは知らないし氣づいてもいないのだが、

(私の主観で、先生はせいぜい中位席官レベルとしてます)

この海依を囲むのは

海依の親友いや朋である、

大道寺 露月  
神無月 由宇

とともに瞬く間に有名になつたなりすぎた3人に

いつもは陰口をたいたたり（海依の友人の露月の毒舌で倍返し）、  
足で転ばそうとしたり（わざと踏む）してくるやつだ。

報復のほうが痛そうだが・・・

とうとう実力行使に来たわけだ。

かえりりしつにあつちやえ by yue

再び海依 side 途中第三者視点が混ざります

「女の子にモテモテの如月君……

君さあ、生意氣なんだよね

一年のくせに出しゃばつて、サボりまくつてるし

しかも、あんな美人な女一人もはべらしてさ」

美人一人つて、由宇と皐月のことか?

まああいつらの容姿は普通より上。

美人の部類だろう（自分の容姿は自覚していないが、他人の容姿はわかるらしい）

だがな、由宇は恋愛沙汰が大嫌いだし

皐月に至つては、朋の俺に対してでさえ氣に入らないことに対し  
て毒舌吐く奴だぞ

俺は朋としてはあいつらは最高だが男だった時でさえ恋愛対象と  
して見たことないぞ

しかも、はべらしてつて俺は女なんだが

女同士に偏見はないが……

つていうか自分の自覚をしろよ

臭いし、ここつい

貴族出身っぽいやつ、香をつけまくればいいもんじゃねえ  
媚売つてゐるだらうのやつ、プライドのない奴が女に好かれるか  
無駄にプライドが高くとも嫌われるだらうが

あああ もう

わざわざいえ

「…言いたいことはそれだけか？

サボつてゐるのはやめえもだらうが、

田立つてゐる？

ただ普通にしているだけだが？

モテモテも別に俺のせいじゃないだらうが」

彼のいや海依の（いかん油断すると彼つていいそつになる  
よ女なの）靈圧は少しずつ上昇している。

彼にとつてはいつも薄くしている靈圧に（制御状態で）1割ほ  
どたしたぐりいしか上がつてはいないのでそれでも

上位席官レベルはあつた。

あーー

昨日鬼道と白打での組み合わせ夜中ずっとと考えていたから

寝不足だし

一回実力の差つてもんを教えといたほうがいいよな。

もつすでにその上がつた靈圧に囲んだ連中は氣押されていた。

詠唱破棄で少し抑えればまあ死にはしないだろつ

寝不足で理性が効いていなかつた

「破道の三十三 蒼火墜」

青い爆炎が飛び出した。

しかし、何者かの放つた鬼道で相殺やひきされた。

碎蜂 side

感じた靈圧の元に向かつてみると、そこは学院裏。

ついた瞬間見たのは、青年いや女か？が靈圧で相手を抑え込み鬼道を相手に放とうとする瞬間であった。

どうやら威力は殺すつもりはないようで抑えられているが、詠唱破棄である威力。

周りに被害が出る

それに、あいつが学院を退学になるかも知れない

そつ思(こ)、といひて反鬼相殺した。

なんだこのとき退学になるかも知れないと思つたのかこの時の私には理解できなかつた。

(今思(う)と、あの時からあの透き通つた水色の瞳に心奪われていたのかも知れない

b y 年後の碎蜂様(

「げつ

やつすきた

すいません、お手を煩わせて、碎蜂隊長(

銀色の髪に水色の瞳のその女(すいこですみね、普通間違えます  
よしよし)は私に向かつてそつにつた。

そつやう頭に血が上つていたらしく

「いい、靈圧を下げるやれ。

けがはさせなかつたのだし、お前に否はない。

様子からして一人に対してこんな大人數だつたよつだしな。」

まつたく男の矜持はないのか

「こいつらは

靈圧を下げるとすぐにそいつらは逃げ出して行つた。

「それでも、お礼を言いたいんですよ

言い訳になりますけどいつもより寝不足のせいで理性が効きにくかつたので。

あのままじや、斬魄刀取り出しかねなかつたので」

斬魄刀。

まだ靈圧に余力がありそuddたし

「お前、名はなんとこ？」

「如月海依。一回生です。」

敬語は馴れないのだらつ

少しがこちない。

一回生か、もつたいない気がするな

わつきの鬼道といい

靈圧の制御といい

自分の非をきちんと認める」とと言つ

ほしいな うちの隊に

「敬語はなくていい。

それより、うちの隊に入らないか?」

少し呆けた顔をしたすぐに返答してきた

「俺、まだ一回生ですけど。」

「構わぬ。わつきの鬼道の詠唱破棄のあの威力、それにその靈圧制御。

すでに始解を習得済みとみた。

死神は実力社会だからな」

ふところから、一応持つてきていった例の紙を取り出し、渡してその場を離れた

時間も押してたしな

後ろでは大きな驚愕の声が聞こえたが

海依 side

俺の鬼道を相殺したのは、二 という隊首羽織を見にまとう・たしか一番隊隊長の碎蜂隊長だった。

翻る羽織の裏色は琥珀色だ。

どこか頑なでもどこかほおつておけない感じがした

冷徹という噂もあるけれど、彼女の裏はその琥珀のように優しいのだろうかとそう思った。

しんでからひくに使つていい馴れない敬語で返したが、

人の中身を見る人だと俺は思った

さすがに

敬語はなくていい

とか

うちの隊に入らないかと言われた時はほおけたぜ。うん

この俺の田立つ容姿からあまりうれしくはないが、俺が如月海依で先生を倒したということはすぐにわかる。

だが、俺の名前を聞いたところは、その噂を知らないところ」と、

俺自身を見て、勧誘してくれたのがうれしかった

思わず聞き返したけど

一回生ですけど

俺の噂はどうやら碌なものではじやないらしい

ズルして先生に勝ったとかいろいろ言われてるのも知ってるし、

性格に問題アリと言われているのも知っているし、

（授業の大半をサボることから内申が悪い）

知らなくてよかつたとも思つたがな

正当に自分の人格や実力を買つてくれたのはうれしかつた。

鬼道とか

斬魄刀の始解を充てられたのにはびっくりしたけどな。

うちの先公なんて全く気がつきやしねえし

卍解ができることは今のところいつつもりはないが

地位はある程度あつたほうがいいがありすぎると困るしな、一番上  
は勘弁したいぜ。

渡されたその紙に目を落とすと

入隊

依頼書

番隊

二

蜂 (判)

推薦者：碑

任命したい

備考：この者を上位席官に

氏名：

それはここ数年使用されたことのない

初入隊時上位席官依頼書だった

(作りましたすいません)

おまけ

海依 side

「俺は早く卒業決定だわ。悪いな。」

「ちよつ どうこうじよな」

俺のその言葉に真っ先に反論する俺の朋で親友の神無月 由宇。

彼女も俺と同じ田立つ容姿で、金色の髪に金色の瞳をしてるんだよな

ツインテールにした髪は揺れ、瞳は田を丸くする。

「一一番隊の上位席官に勧誘された。

以上

「ちよつですの。

「一番隊といえば、隠密機動と関係が深い隊でしたわよね。」

そう敬語口調で言つのが、もう一人の俺の朋の大道寺皇月。いつち  
も碧の髪に瞳つて立つけど、感情を表していない。

「やうやう。

確か隊花は、翁草で、花言葉は・・・

「

「何も求めない」でしたわね。他に「眞信の愛」「告げられぬ恋」  
「清純な心」「華麗」みたいな感じもあるけど

「海依大丈夫なわけ?

合ひやうにない気がするんだけど。

そりや能力的には問題なしだけど。

「そりか?

俺もそりやうのあまり好きじゃないが、碎くちゅうと  
あの目が気になつてな。

まあ、間違つたことに屈するつもりはないけどな。  
あくまで俺の意思是曲げないしな。」

「あなたが決めたことに文句を言つ資格はありませんし、言つても  
りもありませんわ。

崩れそうにならうと私たちは味方ですしね」<sup>わたくし</sup>

「あたしも応援するよ。

あたしも、1（なんとなく）、5（うさんくさい）、6（かたつくるしい）、10（子供に従うのはねえ）以外なら入りたいかな。あとできれば、治癒靈力使うの神経使うから4番隊も遠慮したいかな～～～」

俺が完全に信じている朋という存在。

「こつらは何にも代えがたい俺の大切

「まあ、私たちもすぐに声をかけられるでしょう。この時期隊長訪問多いですし。

私たちの実力のひとかけらも分からぬ肩はいないでしょ」しじ・・

あいかわらず辛辣だな、おい

少し不機嫌そうな由宇は、

「それにしても、サボってた海依が最初つていうのがなんか損した気分。

「あたし、皇月や海依と違つてちゃんと授業出でるのこ…」

「御苦労さま。

授業なんて聞かなくても、教本一回読むだけで充分だろが。試験で結果を出しどけば文句は言えないしな」と俺。

「時間の無駄ですわ。

視線がウザいですし」

と皐月。

俺も、皐月も、由宇も、試験では、実技筆記とともに主席を維持している

サボりを黙認されるのもそのためだ

「うわ――ん

理不尽だ。なんでまじめなあたしが向くわれないわけえ――

もちろん嘘泣きだが、騒ぐ由宇と、切れて毒舌を吐く皐月、ため息をつく俺で

時は過ぎて行つた

後日、皐月は四番隊に

由宇は三番隊に勧誘されることになるのであった。

side 碎蜂

あれほどの実力と見えた、噂になっているに違いないそう思い、試しに自隊の3席の大前田に聞いてみた。

無駄なことばかりよく知っている奴だからな

「如月海依といつやつ知っているか?」

「って

隊長知らないんですか?

一回生にも関わらず、先生を倒した3人組の一人で

まあ、あまり信じられてはいませんがね。

どうせ、ずるでもしたんでしょう

そんな実力の持ち主がひょいひょい出てたまるか」

もちろん聞いたあとこの男は沈めておいた

ここに勝つたら。

副隊長にできるよう総隊長にかけあつとくか

「 」 と二つ子を背負つ者 ものの

「 」 と二つ子を背負つ者

- 2 -

side 海依

今日が俺の入隊試験日。

いやまつたくもって心配しないよ

逆に相手にどれだけ手加減すればいいかが問題だしな

それより俺の機嫌を低下させんのは、馬鹿で愚鈍な先公ごも俺たちの扱いだ。

これだから、無知で無駄な矜持が高い奴はだめなんだよ。

まったく・・・

海依のいるこの試験場にはもう少人数しか残っていない。

といつのも、まだ海依たちの実力をまったく理解していないし、しょうともしていない大部分の先公（一応ましなのうちの特進の担任くらいか）は、

一回生が受かるはずがないとかいう考え方から最後に回しなおかつ、

先に終わった六回生の蔑み、ねたみ等の視線がそれを悪化させていく。

身の程を知れよ、お前ら。

少し機嫌が悪いが見た目はほほいつもじおりなため、付き合いの長い朋である鼎円と由宇以外はそれにきづいていないようだが、

もしキレた時も止める気はサラサラない。

（実はこの一人も少し機嫌が悪い）

逆にこいつがえることにするか

ギャラリーがつるやくなくていい

数人の女子が見学に来ようとしていたが十一寧にお断りした

総隊長が言つ

「今よりは、今年の卒業予定者以外の推薦者を行つ。

今回は3名。いずれも一回生である。

二、三、四番隊以外の参加・見学は自由じや

ぞろぞろと出て行く六回生（かわいそうに落ちたやつもいる）や、見る気のない現役死神。

さらに減つていいくのであった。

残つたのは、言われた隊以外は十一番隊4人と十番隊隊長副隊長、五番隊隊長のみ。

げつ

あの日のわらつていない胡散臭い藍染も（気に入らなにやつに心の

中では敬称をつけない) いる。

八番隊はなんか酒臭かつたな。

副隊長にせかされてたし

大変そうだよなあ よつぽど尊敬していい限り俺は御免だ。

「ま、（これが、珍しくも碎蜂がわざわざ勝つたら副隊長こと、  
願つたのは…

確かにいい田をしておる）

一一番隊志望如月海依、上位席官依頼が出ておるのう

「前へ」

いつもどおり後ろで髪を乱雑に結んだ海依ができる。

こんな日も男子用の制服を堂々と着ている。

その腰には2本の斬魄刀。

もちろんまわりはそれが彼いや海依自身の斬魄刀でなく浅打だと思つてゐるようだが…

砕蜂隊長が蹴りでお前も行けといふ言葉とともに大前田を蹴りだす。

「では、はじめ

まずは小手調べといふか。

普通にやれば瞬殺だしな

視界の毒だから消えてもいいが

この前よつさらに威力を抑えてと・・

「“ぶつ”「言わせないぜ、破道の三十三蒼火墜。」「ぶつ」

威力抑えたのに、スピードだつて抑えたのに刀で受け止めるか?ふ  
つ

しかも、候補生に対して初っ端から始解しようとするか？

まあ俺に対するその判断は間違つていいが

こいつもつ目に入れるのも厭だし

片方の斬魄刀を抜く。

水色の柄に鍔は風車のような形で色は銀。

それを包む鞘は、水色。

長さは普通の斬魄刀と同じくらい。

そして誰にも聞こえないくらいの声で

いや結構離れてるけど五感の発達した由宇や臯月なら聞こえるか、  
うん

唱えた。

「“風よ、我が声に応えよ、風華”」

俺の斬魄刀のうちの一本である“風華”は、俺の相棒で、

朋の次に永きの間戦つてきた戦友。

俺の魂の片割れ。

俺は2本持つてゐるが、はつきり言つて、こちらのほうがなじみ深いし、信頼している。

それは、もう一本の斬魄刀である“地生”<sup>ちじょう</sup>もわかつてくれている。

だつて、“風華”はもう數十いや一百年くらいの付き合つてになる。

はじめて会つてから、戦えない姿もあらわせない世界も多かつた

だけど

そばにいるというだけで自分が一人じゃないと思つたし

大切だと思った。

まあ“地生”も納得しているけどよくわがまま言つね

うん。

だつて見た目かっこいい筋肉多い人なのにへたれがあるもん

まあそれはいいとして

地生は、“風華”と違つて小太刀ほどの長さだ。

だつて斬り合いに向かない刀だしな。

後は色もデザインも一緒だし、

“地生”も“風華”も、始解しても形も姿も色も何も変わらない。

だから・・・

始解しても、さつきの解号が聞こえた人以外気がつかなかつた。

あーー

聞こえなくとも

“風華”のほうなら氣づくかもな

だつてつらすら本筋につけすらなんだけど

刀身に龍の形が浮き出ているから、始解すると浮かぶんだよな。

ちなみに正解したらむつと濃く出るんだがそれは後々として

俺は、瞬歩で相手の背後をとつたが、

まあ腐つても3席その動きに反応した。

仕方ないか、全力出してるわけでもないし

刀は当たらなかつたはずだつた

しかし相手の腹のあたりが切り裂かれ、

そして倒れた

side 作者

それは簡単。

“風華”の力は、風いや空気に関する」とすべてを起こす力

たとえば、ある人物の周りだけ酸素を少なくすることも、竜巻を起  
こすことも可能だ。

逆に空気を増やして密閉空間の気圧を急激に上げたり、光の屈折や反射を曲げたり、ダウンバーストを引き起こすことも可能である。

だが、始解状態ではためを必要とするものは本当に重くためが必要になる。

もともと風は、雷、地、炎、水どれよりも威力が小さくなるとされているが、海依に限ってが全くそういう見えない。

精霊術師の中では最も戦闘向きでなくて、早いが軽い攻撃だといわれ、薙まれることも数多くある。

同じ十の精霊を使つたとしたら絶対に負けるし

だが、逆に空気はどこにでも存在するため情報に特化している

であるが、一人に操れる精霊には限界があり

風術師はそんな中を生きている。

数を維持するためにも血にこだわるのだがそれはおいてもこの

海依が起こしたのは、かまいたち。

皮膚表面が気化熱によって急激に冷やされるために組織が変性して裂けてしまつことだと認識されてはいるが

旋風の中心に出来る真空または非常な低圧により皮膚や肉が裂かれる現象で、それを部分的に海依は引き起こしたのである。

現実的に自然におけるのは難しいが意図的に海依は操つたのである。

「勝者、如月 海依」

一瞬であろうと見える人がいたのなら驚くだろう

集まつた風の精霊の数と速さに・・・

俺がもといたところへ戻るといふと、総隊長が

「待て」

と俺を呼び止めた。

まだなんかあつたつけか？

いやないだろ、

相手が弱くてまだ少しむしゃくしゃしていたので少し高ぶり少し靈圧をあげたま

振り向き

「俺にまだ何か用が？」

「うむ

おぬしなぜ女子なのに、その男子の制服を身につけておるの  
じや？」

あー

すごいな 気付いたのか

ま、そういうわけでもないし

男装してゐつもつはないしな

つていうか逆に女の格好つてつやっこだよな

「理由が必要か？」

俺はこっちの色が好きだし、違う性別の制服を着たらいけないなんて

規定されてないだろ」

と返したが

後ろの外野が、

つるつぱな確か十一番隊三席の斑田一角だつけ？

が言つ

「はああ？

総隊長 冗談がきついぜ

「ここにまどりの覗たつて

男

だろ」

周りには頷いてる人ばかりである。

いや別にいいぜ男に間違われるのなんてしようちゅうだし、慣れてるし

つて言つたか男とか女とかつてどいつもこいといふかなんといふかなあ  
いじまで断言されるのもなんかなあ

間違われてるとさすがに後々面倒そうだし

「あのこれでも俺いや私は生物学上は女ですか……？」

女のからだ面倒くさいにもほどがあるけどな

まわりは驚愕に包まれたのだった

いちいち男か女か聞かれるの面倒くさいし

死神になつたらへくるのやめるか

髪

あと建前で敬語使つようとするか

敬語じやないとぼりが出るしな

その騒ぎが収まつた後

「一一番隊隊長碎蜂の申し出によつ、このものを長く空席であった一一番隊副隊長に任命する。」

いきなり副隊長になるとほ俺も思つていなかつたが、

あの頼りのないのが碎蜂さんの右腕にはふわわしいことは

まつたく

思えず、その任命を受けた

ちなみに臈月と由宇は無事にそれぞれの隊の三席になつたんだけど

それはまた「二」と「四」をまつてくれな

side 碎蜂

私が副隊長に推薦した　如月海依

垣間見ただけで彼女には、実力があると分かった。

であるから総隊長にある条件を出した

うちの大前田3席に如月海依が勝つたら空席の副隊長に就かせても  
らうと

私の期待は外れず、見事彼女は倒したのだった。

もつていた刀片方は小太刀だつたが、力を感じた。

しかし使っていたのは間違いなく斬魄刀だ。

どうこいじだ？

終わった後すぐに聞いてみると、これも斬魄刀で2本持つていると  
いう。

私が知る限りでは初めてのこと

私は彼女の実力に満足する一方なぜかほかのたしか、大道寺と神無  
月だったか？

と話している時なぜかもやもやした何かを感じた気がした。

そして、彼女の実力はまだ隠されていると薄々感じた。

「一」という字を背負つ者

3

海依 side

俺が副隊長という地位について約7、8カ月という月日がたつた頃にそれは起こったんだ。

碎蜂隊長は想像した通り強い覚悟をもつて力を使う意志を持った人だとこの間に見て取つた。

だがそれと同時に、弱さをやはり持つて居ると感じた。

弱さは誰でも持つものだと俺は思うんだが、彼女はそうは思っていないらしく、特に立派に見せないといけない部下の前では弱音一つ吐かない。

それがす”くもどかしかつた。

俺は、こいつの碎蜂の補佐なのになにもできていない

力がいくらあっても俺は無力だと思うんだ。

そつ思うんだ。

解説【いまだにこのふたりは理想の部下と上司に見えますが、まだ本当の意味での支えあう関係ではありません。

海依は、碎蜂に頼つてほしいと思いつつそれを部下が先に口にすると碎蜂が気にすると思いつこしない。

そして、過去の記憶からなにか辛い記憶が彼女を頑なにしているのではないかといふことには気づいている。

本人が話してくれるることを待ち続けている。

碎蜂は過去の離別から深く人と接することを拒んでいるが、海依のことは信じたいと思い始めている【

それが起つたのは

ある一枚の書類がきっかけであった。

「な、この書類つ

遅すぎなんだよつ来るのが

半場切れつつ俺はいった。

その書類には「<sup>記</sup>」記されていた

『今日未明出現虚の訂正』

と。

数刻前、大前田3席を筆頭とし、残りを下級席官4名の小隊による任務が課せられた。

それは、

今日未明出現虚の滅却・昇華。

その時の情報によれば、

靈圧分析により、だいたい低級（海依にとってB～D級）虚十  
数体

一人2～3体くらい平氣だらうと思い、派遣したのだった。

そして今に至る

海依の手に握られた書類は少しくしゃくしゃになり、

他隊からの書類に混ざっていたそれ。

「大前田のやつっー！」

「片づけてないからか

「ちつ

それを見つけたのは本当に偶然だった。

大前田の未処理の書類を親切にも海依が片づけてくれたから気づいたことだ。

自業自得といえばそれまでなのだが

その書類にはいつも記されていた

一部自分の言葉に直すが

『今日未明 出現虚の訂正

中、低級虚数十体

及び巨大虚数体

安全のため、副隊長もしくは隊長に命ずる』

と。

急いで隣部屋の隊主室へと向かつ。

隊により副隊長と隊長が同じ部屋だとか、隊長のみとか、副隊長、隊長、3席で使用なぞれまぜもあるが、

今現在、

海依が副隊長の一一番隊では、副隊長、隊長の同室で、隣が3席他である。

解説【今現在・由宇、皐月、美月はいずれも隊長から3席まで使用です。】

また原作イメージで原作の時は彼女らではないので、一一番隊は隊長のみ、二、四、十のいずれも副隊長、隊長のみです。】

「碎蜂隊長つ

大前田のやつこんな書類埋もれせたんだけどーーー」

「なんだ?」

書類を読み、碎蜂の顔色が変わる。

あくまで、海依が気づく程度だが

「あの、阿呆が

行くぞ、ついてこい、殺されるなよ」

「わかつてゐつて」

s.i.d.e 海依

そして、俺たちは現世に降り立つた。

もちろん限界をして。

俺をはじめ、由宇と皐月は普段から靈圧制御装置を付けている。

俺の場合、この左手人差し指についたアクアマリンの指輪である。

見た目も科学的にもアクアマリンではあるが、これ最初は靈石となつた真珠なのだがそれはおいといて、

俺達の場合これで8割の靈圧を封印している。

ところの肉體、魂魄的に常に靈圧を出してゐるのは危険だからで

体の負荷を減らすためだ。

解説【のため封印 + 限定とこいつ】で

つまり、本来の力の4パーセント、

封印状態の2割ということである。

2割でも、他隊の副隊長レベルはあるのだが。

ちなみに封印しただけの本来の20%だと総隊長の1・2倍。

（強）

なんでもコエいわく

『男にしては華奢で細い、女としてもほつそりしたその指にはまる  
指輪は、

シルバーで目立つにくいが、纖細な意匠が刻まれ、アクアマリン  
の淡い透明な水色が海依の雰囲気にあつてゐる』

「うー。

俺は全くそういうのに興味はないんだが…

とりあえずそんなわけで靈圧の無駄遣いは避けたい。

とりあえず感覚として降り立つた時死神5人分の靈圧と気配がまだ感じられた。

まだ、虛の靈圧はしない。

どうやら間に合つたみたいだな。

だがどこか違和感があつた。

(靈力もなにも感じないのに、

気配がもう一つ?

人間や靈の気配じゃないし)

靈圧の下で見たのは、巨大虛と戦う3人とけがをして横たわる2人  
だった。

「靈圧を消せるタイプ、か。くそつ厄介だな」

やつこつのは碎蜂。

「はじめら

やつと後ろへ行けつ

最小限守つてやるが自分の身は自分で護れ

言葉づかいを気にする余裕はない。

副隊長になつてからは一応気をつけていた言葉遣いのかけらももつ  
ない。

「は、はい」

しかもけがしてるふたりは下位席宜。

大前田のやつ上なら下を守れよな

あとであいつは減給だなこりや

あいつはそんなの痛くもかゆくもないだろ!つが

ボンボンは

だから嫌いなんだよ

倒れてるほうも命に別条はないそつだ。

ま、逃げなかつたことだけでもほめてやるか 大前田  
俺はな碎蜂（二人の時はいいと言われた）がどういつかは知らな  
いが…

中、低級虚は数減つてゐからやられっぱなしじゃなかつたようだ  
しな。

そつ考えやはり俺は“風華”の方を取り出した。

“風華”の方を信頼してゐるものもあるが、もう一つは地系である“地  
生”は現世では特に使いにくいかりである。

同じ地系でも、皐月の“花音”とは使い勝手の良さには大きな差が  
ある。

だつて同じ地系でも“地生”は土。

たとえば土の壁を作りだしたり、地殻変動を起こしたり、

と更地ならともかくいは町のど真ん中の公園近く。

とこつわけで

“風華”を始解した。

“風よ、我が声に応えよ、風華”

その始解で次々と雑魚を一掃していく。

一応周りの被害を最低限にしつつ、

(だつてそうでもなくとも

絶対始末書書かなきやだめそうだしな

あんま増やしたくないつていうか)

その途中、巨大虚がある一点を田指そうとしているのが見えた。

その先を風で確かめると靈圧の高い人間の少年。

巨大虚がその少年に攻撃しようとすると察し、小規模の竜巻で周りの雑魚を吹き飛ばしその勢いで飛び込み、

自らを盾にしてその子を抱きしめてかばった。

(だつてとても懐かしい靈圧がしたから。

大切な子の)

始解して いたため “風華” で、その子を念入りに風の結界で守り、俺自身は最低限 “風華” が護りの風で衝撃を緩和してくれたようだ。

それでも、肋骨2、3本折れたな、こりや。

「おい、海依（彼女も二人の時は名前呼び、海依が頼んだ）。

大丈夫か？」

そう尋ねた碎蜂に、

「大丈夫だよ。 碎蜂。

それよりこの子をお願いします

俺は、一気に残りを昇華します

残りには、雑魚もまだ残っているが、巨大虚も3、4体以外まだ残っている。

「そんな怪我で無茶なこと

「大丈夫。俺を信じて」

・・・約束は守れよ」

一殺されるなよー

その言葉での約束

現世に来る前に言われた言葉

「わかつてゐつて」

俺は一気に側にあつたビルの上に飛び上がつた。

隠していたし

これからもできればここにずっといたかった

だけど

護れないのはそれ以上に嫌だから

悪いな、由宇、畢竟お前らもばれるかもしない・・・

そして、

溢れでる言の靈を體える。

「“カラリュウジンブウカエン 卍解、カラリュウジンブウカエン 黄龍迅風華遠”」

刀身にはくつときと龍の形が浮かび上がり、

水色で銀の光を放つ龍 黄龍 が現れる。

由宇の“雷霸”も龍だが、あちらは青龍で青白い電気をまとった金の光を放つ由宇の“雷霸”に比べ、

俺の“風華”は体が少し短めで、体は透明に水色や碧がかっている。

そして纏つのは金ではなく銀の光。

冷たい銀ではなく、やわらかい少し水色や碧、紫がかつた銀の光。

「“風華”、思つ存分やれ。

“くら俺でも、ぶち切れた”

龍 “風華” の手からつむじ風が出たかと思つとどんどん大きくなりそこにいる巨大虚は吹き飛ばされ、

「いまだ」

上に浮きあがつた虚の頭を的確に打ち抜く。

そして、それは粒子となり昇華された。

そして戻るとやはり驚いた顔の碎蜂の姿。

「海依、お前・・・

「すごいです、あの精霊の数」

精霊？

つてこいつ精霊術師かよ

その声の発信源は俺がさつき助けた10をいくらか過ぎたくらいの少年。

その瞳で本当はわかつてた

わかつてたんだ

その少年の瞳は、海依と同じ透き通った水色をしていた。

漆黒の髪に俺と同じ水色の瞳

女の子と見間違いつた愛らしい顔

視るとその膨大な精霊は 風 。

つまりー風術師。

「お前、如月の分家？」

本当は信じたくなかったのかもしれない

だってそなうなら

その少年のどこか哀が漂うその少年が大切なあの子だということ

あの子を悲しみに落としたのは 俺 。

護りたかったあの子を

「それ、本気で言つてるんですか？」

【姉様】。

【姉様】

碎蜂や他の死神達の顔に驚愕が走つた。

ああ あの子 なんだ

やつぱり

「ああ、  
風<sup>フウ</sup>か。」

俺は今年12のはずの弟の名前を呼んだ。

死んで一年半忘れた」とのなかつた最愛の弟の名前を。

「そうです。海依姉様の弟の風です。

姉様が死んで一年半どうして会いに来てくれなかつたんですか？」

死神になつたのに

死人と生者はかかわるべきじゃない

そう思ったのに

「大きくなつたわね。

でも俺は変わらない俺の時は止まつてゐるから、俺は死んでいるから

お前を死人の俺が縛るわけにはいかなしだらう

「それでも、！！

姉様は姉様ですっ

僕の大切な姉様ですっ」

涙目になりながらそういつ

「ああ、そうか。俺にとつてもお前は大切な弟だよ。

ところで、じい家から離れてるよな

どうしてここにいるんだ？」

俺は一度もこいつの涙に勝てたことがない。

今回もそうなつてしまつた。

「他家のとの合同任務で、離桜家の留依をことですよ」

なんだ。知らない名前。

とつとと考えるのを辞めた。

「じゃあ、合流してやりな

今度休みに会いに行つてやるから、な

その決意をするには時間はかかるだらうナビなどな

「はい・・・・」

うちの家に記憶置換は無意味なので

碎蜂がそれを作った時

「つちの家つてか精霊術師には無駄だよ。記憶置換」

そういう

今の俺の場所へ　　還つて行つた。

海依は、本当にいやつだと想ひ。

私のことをこいつにして、

補佐して、信用してくれて、

いろいろ気を使ってくれて

あいつがある一線を絶対に超えようとしない

私がそれを超えるのを待っているのだと想ひ

無表情無感情を言われる私ですらわかる

でも、怖いのだ

だれかを作るのが

気を張つていないと誰かに寄りかかってしまうこいつで

側にいなくなるを思った時

手遅れだとおもつた。

でも、それがなかつたら私は今もまだ虚勢を張り続けたのかもしない

- 虚戦闘開始時後

虚と戦つていたはずなのに、いきなり、周りを吹き飛ばして移動した海依。

ある一点に向かって疾つてそして何かを守るように攻撃を受けた。

あれくらいで死んでしまうはずがない

そう思ひのこ、少し怖くなつた

急いで相手を切り捨て、海依のもとに向かうと傷を腕や背中に受けている海依と無傷の少年の姿がそこにあつた。

「大丈夫か？」

そう聞いた私に

無事そうに言つたが次の言葉には驚きを隠せなかつた。

「それよつこの子をお願いします

俺は、一気に残りを昇華します」

何を馬鹿なことを と思つた。

でも海依の口は真剣で

「大丈夫。 俺を信じて」

それで先ほどの約束を口にするのがやつとだつた。

でも…もし今回約束を守つてくれたのなら私は前に進めるかもしけない

そう思つた。

ビルに飛び移つた海依が唱えた解説にはおどりいた。

「“卍解、マツコウジン黄龍迅風華遠”」

海依の瞳のように透き通った——いやそれ以上かもしれない——水色の体に銀の光を放つ龍。

それはあつとう間にすべてを倒してしまう。

ふつう卍解とは

何年何十年の経験や戦闘の中で見つける斬魄刀の一<sub>二</sub>段解放。

幾人もの死神がそれに挑戦し得られなかつたもの。

その威力は始解の数倍数十倍。

そして、隊長になる条件もある。

海依はまだ死神になつて一年もたつていないので……

すると、海依の助けた少年が

「あの……」

「お前、私たちが見えるのか・・？」

「はい、見えます。あの僕を助けてくれた人は誰なんですか？死神さん」

といった。

はつきりいつて死神が見え、死神のことを知っていることに本当に驚いたのだが、聞かれたことに答えた。

「如月 海依。私の信頼する副官だ」

と。

私が帰ってきた海依に問いただそうとした言葉を、その少年はさえぎり。

「すごいです、あの精霊の数」

話の流れから海依の生前の弟らしく、

風

ところへじい。

海依に大切と断言された、風がうらやましかつた。

——精霊術師という存在に記憶置換が効かないことも初めて聞いたのだが

私は今回のことで一番隊移動

——どう考へてもおかしいのだが——  
になつた海依にたいしてやつと

私が海依に見えないとこりで支えられたのだと心の底で思った、

だから・・・・

もう一度

信じてみようと

信じてみたいと

そう思つたんだ

夜一樣の残した心の穴はまだふさがらないけど

いつか

海依に話せるだろつか？

s\_i\_d\_e 碎蜂 e\_n\_d

s\_i\_d\_e 風 (この前後関係は風炎でやつてます。)

(風の結んだ絆 炎の笑顔で描写済。早く読みたい人はサイトのほうへ いづちへの移行予定は未定です)

離桜家の留依さんと来た任務。

今日が初対面でした彼女はとても鋭い暗い眼をしていました。

その理由を僕は知っていました。

たしか、半年ほど前に死んだ彼女・留依のいとこ。

僕ははつきりいって姉さまの一件以来離桜のひにては、あの

姉様を殺した双子のことを

憎らじことまで思つていた

憎むことでしか姉様を失つた悲しみは埋められなかつた。

だからその双子の片割れが死んだと聞いた時も、

僕の姉様を見殺しにした報いだと

姉様の足手まといになつた報いだと

そう思つたんです。

悲しみに押しつぶされそうになりながら戦つ留依の姿がどうか

自分を見ているよつで

そんな考えをひと時だらうと忘れてしまつていた。

儚くて弱い年下の少女。

誤つてあの子が傷ついた時に見せた

赫への恐怖。

全てが終わつた後の彼女の着物の袖は血に濡れていた。

「ちよつとへましてしまいました、すいません」

痛みをこらえていう彼女の体は小さく見えて

「黙つて、今手当しますから

終わつたら待つていてください

車の迎え呼んできますから

なぜか、守つてあげたいとわざかに思つたんだ。

氣のせいだと頭から消したけど

あとでその自分の気持ちを無視したつけを払つことになるのが

か弱い少女だとこいつことを誰も知らなかつた

任務が終わつて氣は緩んでいたのだろう

そこにある再会を僕はした

任務で気が緩んでいたせいで僕は虚の接近に気が付かず、気づいた時にはもう回避が難しい状況だった。

思わず口をつぶつたそのとき

「危ないっ

ひどく懐かしく聞き覚えのある声は、切羽詰まつていて、

その声の主は僕を庇い抱きしめていた。

どうか懐かしくて

泣きたくなるくらい暖かいその腕。

やつと口をあけると

口に入ったのは夜の闇の中で輝く

“銀”

月光を浴びて輝く銀糸の髪に、透き通るよつたな懐かしい水色の瞳

嘘だと思った

そこにはあつたのは別れたときそのままのままで

姉様の姿

でも確信してしまった。

その“銀”の人が操つて見せた天災規模の精霊の数。

そしてその統率力。

間違いない 姉様だと

僕はもう長いことあつていらない死んだ姉のことを思い出した。

-----

姉様こと如月 海依

僕の異母姉に当たる彼女は年にして5歳上の生きていたら17歳の姉。

姉様は純血主義が多いここに如月家にとつて珍しい術者同士のハーフだった。

今は亡き地術師の本家大道寺家の娘と如月家の現党主の間に生まれた姉様と

その後妻として入りこんだ如月の分家出身の僕の母。

体が弱く、大道寺としての力が弱かつたらしい姉様のかあさまは、姉様が2、3歳のころに亡くなつたらしい。

そして姉様は容姿こそ如月の色彩の薄い瞳

解説【風術師の本家「如月」他分家では、水色が一番力が強いほうで、より透き通つたほうが力が強い。ほかは薄い灰色や茶色いが緑である。

緑が一番強いといわれている】

で、力の強いあかしである水色の極限まで澄み渡つた透き通つた瞳をしているが、

『地』の『土』の力と、『風』の力両方に富みその血を色濃く受け継いでいた。

今でも覚えている。

姉様がわずか8歳にして操つて見せた精靈の量とその力を

でも混血を忌み嫌つた典型的純血主義である僕の母は、僕を極力引き離そうとした。

僕は姉様をすぐ慕つてたんだけどね

尊敬もしていたんだ

強くて優しくて何でもできる姉様を

でも 姉様は僕を置いて死んでしまった。

昨年の 5月に。

姉様の朋友ともである由宇さんと皐月さんと一緒に

その死んだ日何が起きたか僕も知らない…

あの強かつた姉様が、由宇さんたちが自分でへまをするはずがない

だから、

あの双子のせいにしたんだ

懐かしいのも当たり前だ

姉様なんだから

「誰？」

と言われた時、姉様にとつて僕はなんだつたんだろうと思つた。

ぼくは姉様が大好きだつたいや今でも大好き。

でもそのあの言葉で僕のことがきらいなわけじやないとわかつたんだ。

『でも俺は変わらない俺の時は止まつてゐるから、俺は死んでゐるから

お前を死人の俺が縛るわけにはいかないだろ』

そういつた姉様。

僕のことを考へてくれたのはわかるでも

自分の気持をはつきりと言つと

俺にとつてもお前は大切な弟

そう言つてくれてとてもうれしかつた。

今度休みに会いに行つてやるから

その約束が当分守られることがないことを僕はまだ知らずにいた。

僕は姉様が強い存在だと思いきつていつたんだね。

----- side 風 end -----

このことがきっかけとなり

如月 海依は零番隊副隊長になつたのだ。

「一」の字を背負つ者—完—

風 Side の続きや前後は、風炎」と風の結んだ絆

炎の笑顔

で。

「三」の字を背負つ者

由宇独白

あたしだって、傷つくことはある。

あたしんちは、皐月みたいに養子つてわけじゃないけれど、うちの父にも母にも愛人がたくさんいる。

認知して引き取つた子だけで、男7人女5人。

一応あたしは、本妻である母と父の子らしいけど、本当かどうかも分からぬ。

ただ力が強いから重宝されていたんだと思つ。

「あなたなんて力だけのくせに」

そういうのも上の姉

あたしのいなこところで罵る、弟や妹、兄・・

だから愛されたい愛したいなんて思わなかつた。

愛は、破滅への序曲。

愛されたいという思いは忘れてしまつた。

愛したいという気持ちは、なかつた・・ハズなのに・・

自分で自分が分からない。

あたしは幸せになつちゃいけないんじやないか

前世とパラレルワールドの私を思い出して見て  
ますますわからなくもなつた。

だつてどの世界も私はこの世界より愛に恵まれてたから。

そして異世界の自分に嫉妬する。

こんな赫く血塗られた手であの人に触れていいのだろうか?



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1849z/>

---

死神達の恋歌～月の導き～

2011年12月21日12時55分発行